共にすることは或は悲しみを共にするより困難な場合が度々あります。せうが、若し自分が他人よりも成功しない場合他人の大なる成功を心より喜び、又自分が少しく疏んぜられ居る場合に他の人が愛され賞讃せらるゝを心より喜ぶ事が出來るならば、是れ眞の同情、眞の克己であつて、所謂キリスト・イエスの心を以て心として始めて行ひ得らるゝ德であります。

ピリピ二〇一—五

(三)既に世を去りし聖徒と交る事。

路廿〇廿八

此等の聖徒は世に對しては既に死にたれども神に對しては尙生ける者で、聖公會の中にありて最も進歩發達せる部分を形成し、私共と同じくキリストにありて一體となり、祈禱と讃美と信仰との一つの生涯を送つて居るのであります。眠れる聖徒等は今は肉體に於て見えませんでも、なほ公會の大部分を占めて居るのであります。たとひ今日地上に於て神の僕の數が割合に微々たるもので、且つ此の僅かな信徒の中にさへ種々な分裂、宗派があつて地上の聖徒はいはゞキリストの體の唯一小部分に過ぎませんが、死後忠實なる聖徒の中には宗派もなければ分裂も無い事を思ふて大に慰さめらるゝのであります。私共は聖餐式に於てキリストの全公會の爲めに祈る時、また埋葬式の第一特禱を捧げる時に、死ねる聖徒を記念いたします。

(四)聖なる天使と交る事。

此の天使との交際及び一般聖徒との交際に就いて希伯來十二〇二二、二三及び聖餐式中の『故に我等御使と御使の長云々』を參照。

罪の赦

罪の赦免、身體の復活。限りなき生命を信ず

一寸考へるならば罪の赦は單純で容易なものゝ樣に思はれますが深く考へると神の爲めには實際之ほど不可解な困難なものはありません、罪を赦すとは罪過を無頓着に考へ、又は大目に見過すのでなく、又

ロマ六、〇
二十三、
希伯來七
〇二十五
詩二〇三
三、十二
五一、〇
二七、八
賽二〇十
八、三八
〇十七、
四四〇二
二
エレミヤ
廿一〇廿
四
詩百三〇
十二
米迦七〇
十九
路七〇
十四
加十五
哥羅四
〇十四
哥林多後
五〇十
四、五
ヨハネ壹
三〇十六

罪の自覺と其の根源を其の儘にして唯だ形式的に現在犯した罪を赦すが如きでもありません。私共がキリストの十字架によりて神よりの賜として頂く此の大なる救は實に徹底した救であります。斯くの如き大なる救は如何程罪の汚れを切實に感じて居る者でも、信仰をもて十字架の下に來り伏す時に、跡形もなく洗ひ潔められ、神の聖徒とせられます。罪の赦の全き事は色々の譬をもて美はしく記されてあります。

赦さるゝ身の　さきはひは
世にたぐふべき　ものぞなき
わが身もたまも　みなさゝげ
聖名をたゝへて　世をすごさん

此の罪の赦は

(一)世界萬民の爲めであります。斯く萬ての人類の爲めに救に入るべき道が開かれたから、如何なる大罪を犯した罪人でも此の救の泉に來れば、洗ひ清められるゝ事が出來るのであります。

詩三十二
〇一、二
ロマ三〇
廿三—廿
五弗所一
〇七

(二)之は又我等各自の爲めであります。私は自ら知れるも知らざるも、記憶に存するも存せざるも、大小一切の罪過と、思想言行に於ける我儘、無智、愚鈍と、爲すべきをなさず爲すべからざるをなしたる事と、性質や品性の萬ての缺點とを悉くキリストの爲めに赦して頂きます。斯く無罪にせらるゝ事の喜は、言葉に云ひ顯はされない程であります、然ば此句を稱へる度毎に嬉しく感じます。

身體の復活

救とは或る人々の思ふ如く單に私共の靈魂のみに限らず、身體をも含むのであります。神は靈魂と肉體と兩つながら造り給ひて、何れも貴重なものなれば、神は靈と肉との二つを惡魔と罪との力より救ひ給ふのであります。私共人類が全身、全性、全靈を全く救はるゝまで神は

羅馬十二〇一　哥林多前十一十五〇三　哥林多前十五八〇

決して滿足し給はぬでありませう。キリストの御復活は取も直さず私共の身體の甦る事の保證であります。私共の魂が新しき生命に生き返る時に私共の肉體にまで祝福が及ぶのであります。眞の信者は其の身も魂も神のもので無い事を知り、又此復活の大なる望あるが故に勉めて其の身體を潔く保つのであります。私共の身體は『活ける祭物』として神に捧げねばならぬのであります。私共が飲食其の外凡ての動作を以て神の榮光を顯はすやうにし、又聖靈の殿として私共の肉體を尊く潔く保たねばなりません。若し私共の生きて居る間に主キリストが御再臨ましますならば如何であります。死せずして先きに死し者と共に主の來り給ふ時に新なる榮光に化した身體を以て主にまみゆるのであります。勿論只今と同一の身體ではありませんが、而も之と全然異なつたものでない身體を以て甦へるのであります。

哥林多前十五三十一―十五　哥林多前十六廿、十九　帖撒前三―四十七

キリストを信ずる者の希望。私共は死ぬるも生きるもキリストの御再臨、即ち大なる復活の日に天使と伴しく、或は其よりも更に勝りて主の榮光の體に象られ（神に化するのではありません）罪惡を離れて全く潔く全く罪ない美しき者となる事が出來ます。之が聖徒の希望であります。現在の肉體は度々疲勞し、疾病に犯され、靈魂の助けとなるよりも寧ろ妨害となることが多くあります。或は腦の痛みの爲めに考へることと出來ず、身體の虛弱なる爲めに充分な活動も出來ず、羅馬書八〇二三にある如く自ら心の中に歎き私共の『身體の救はれん事を俟つ』のであります。復活の身體は之に反し、所謂靈の身體で自由にして强健な且つ榮光化し、全然靈によつて支配されるのみならず、靈の要求を全うする事の出來る體であります。こは再び死を見ざるものであると主イエスは仰せ給ひました。此の大なる希望を有つ故に、キリスト信徒は其の親愛する友と死別の時にも猶ほ絶望しないの

路加二十〇三十六　腓立比三〇二十、二一　路加二十〇三六　帖撒前四〇十三―十八

であります。

限りなき生命

約翰一〇、四十、一〇哥羅西三、約翰壹五、十二、十約翰三〇、羅馬六、六〇、二三

此の世の生涯は如何にも重大に思はれます。多くの人々は人は此の世限りのもので、此の世が最終であると考へます。然し現世に於ける人間の生涯は、死の向ふにある永遠の生命の爲の準備に外ならんのであります。或る敬虔なる聖徒の言に『信者の生涯は死を通じて永遠を望むの信仰あるにより維持せられ導かるゝのである』といひましたが實に其通りであります。主キリストは屢々「生命」の事を敎へ給ひました（約翰福音參照）のみならず、主御自身が私共の生命であると記してあります。神はキリスト信者に主を通して永遠の生命を賜ふのであります。其の永遠の生命は主を眞に信ずる時より私共に入るので、現世より此の恩惠に浴する事が出來るのであります。約翰五〇二四、十一〇二六、八〇五一の聖句によると主の妙なる御約束を味ふ

約翰十五〇六

事が出來ます。さて『死』とは何でありますか。私共の肉體の能力は消失し（死者は見聞すること、感知すること、行ふことの力を失ます）成長進歩の力は消滅して（生命のある間は身體、精神共に絶えず新たにせらるゝ事宛ら樹木が成長して枯れ始まる迄、新たなる葉を出し、花咲き、果を結ぶ力を有して居るが如し）最後に壞敗來り、遂に墓に埋葬せらるゝのであります。靈魂の死も幾分か之に類似して、善に向ふて進歩發達する力が失せ、罪惡の爲めに漸次に墮落して、神に對して死ねるものゝ如くなるのであります。丁度枯れた枝が木の幹より斷ち切らるゝが如く、腐敗せる靈魂は聖なる神と其聖き天使の前より消滅すべきものであります。無量の慈愛ある天父の御招きと良心の忠實なる警告を輕じて、善を捨て惡に從ひ、日に罪の生涯を送り續けて居る者は、自殺中の最も恐るべきもの即ち身體よりも更に大切な尊き靈魂が靈的自殺を爲、未來に於て永遠の苦罰を受くる種を蒔くのであります。

羅馬六〇二三

詩十七〇十五

默示錄二〇三、四

靈的の死の恐るべきを熟知し給ふた主は、肉體の死は殆んど眼中に置き給はなかつたのであります。加之主は信仰を以て己に來る者の靈と肉を救ひ、靈魂を死滅に導く罪の働きを止め、心中に新なる力の基を据え給ふが故に、たとひ肉體は一時墓に睡むることあるも、靈的に死する事を逃れるのであります。『萬ての物の中にて死は最も恐るべきものなり、是れ死は萬てのものゝ最終なればなり』とはアリストートルの言でありますが、キリスト信徒に取りては、死は唯だ光明に至るの門であり、神の久遠の樂園に入るの扉のみ、死の谷蔭は如何に深黑であるとも、死の河浪は如何に荒くとも、一度これを過ぐれば輝く聖顏の光を仰ぎ、長閑なる永遠の春に入るのであります。長き夜の眠より『醒む る時容光を以て飽き足ることを得』るのであります。私共の未來の生活に就ては極僅より敎られて居りませんから、充分に知る事が出來ぬけれども、確かに神の聖前に潔き奉仕の生涯に入るに相違ないと信ずるのであります。

信仰に就て

さて志願者が洗禮式の時に此の信仰個條を信ずるやと尋ねらるゝ時、眞實を以て「我之を信ず」と答の出來る樣に此れに關する種々の點に就き祈を以て充分に沈思默想し、少にても理解し難き處は腑に落るまで質問し、研究すべき事を說き勸め、志願者をして中心より堅固な活ける信仰を抱かせる樣注意せねばなりません。終りに臨み、今一度信仰に就き總括して述べますならば

（一）使徒信經の第一の語は「我は」であつて、後に二度繰り返してあります。團體的信仰は誠に美はしきものであつて、多くの兄弟姉妹たちと共に心と聲とを合せて此の貴き信經を稱へる時は、壯大なる有樣でございますが、他の人とともに稱へましても、云ひ現はす處の信仰は自分自身の眞實なる確信でなければなりません。たゞ流れと共に

流さるゝものでなく他人の立派の信仰にたよるものでなくして、己の信仰によつて救はるゝものであります。

昔ユダヤ人は大先祖アブラハムの信仰にたよりながら墮落しました。主イエスの人に求め給ふ事は「汝此を信ずるや」との事であります。

馬太三〇九　約翰十一〇二六

(二) 聖書にある歴史的事實を信ずる事（即ち信經に述べた事柄は皆眞實にして疑ふべからざること）。

歴史の事實

(三) 聖書に錄された神秘的の奥義を信ずること。

教理

(四) キリスト教の歴史及び教義を信ずるのみならず、活る神を信ずること。キリストの萬ての御働きに頼より、特に主の十字架に就ては片時も忘るゝ事なく、且つ主の御慈愛にも勝りて主御自身を愛し、我が喜、我が望、我が生命の君として信ずるのであります。父なる神、聖靈なる神も亦同樣であります。愛は眞の信仰より離すべからざるもので

愛なく信仰なくして神を知ることは丁度惡魔が神を知ると同じく、是より恐しい事はありません。信仰と愛の美しい關係は彼得前一〇七、八に錄してあります。

雅各二〇一九

(五) 信仰と行爲の一致を勉むべき事。眞の信仰ある者は此の罪惡の世に滿足して罪を犯しつゝ進み行く事が出來ません。萬ての聖徒はキリストの愛に勵まされて己が爲めでなく、救主の爲に生涯を擧げて全き服從と忍耐を以て心を熱くして主に事へ、主の尊き聖名の爲めに一意專心に働く筈であります。

羅馬六〇一二　哥林多後五〇十四十五

(六) 信仰の成長。活る信仰は聖徒の一生涯の間、日々進歩發達せねばなりません。是即ち三位一體の神が私共聖徒に求め給ふ處であります。

帖撒後一〇三

十誡

信仰に次いで服從生ず

【教師の心得】

凡そ人間相互の間でも、人を知り人を信じて初めて之れを愛するやうになり、其の人を愛して初めて之れが爲めに盡す事が出來るのであります。神に對しても同樣でありますから、公會問答には先づ信仰個條を載せ、次に十戒を錄してあります。聖洗式に於ても信仰の告白の次に「御心に從ひ其の誡命を守る」事を約束致します。此の順序は正當にして自然であります。即ち第一、信仰、第二、愛、第三、奉仕と云ふ順序になるのであります。凡そ眞の生きた愛の燃ゆる信仰には必ず從順が伴ふもので、既に述べた通り『信仰も行爲を離るれば死ぬる』のであります。又主イエスは『汝等若し我を愛するならば我が誡を守

雅各二〇二六
約翰十四〇十五

使徒二六〇十九　哥林多後三〇十八

れ』と宣ひました。聖パウロの言の中にもパウロの生涯に驚くべき新變化を及ぼした秘訣が現はれて居ります。私共が生涯中主の御榮を明らかに見るに從つて益々主に服從する事を喜び、之れを完全に爲し得るに至るのであります。

加拉五〇六

信仰と行爲に就き聖パウロと聖ヤコブの敎が矛盾する樣に思はれるかも知れませんが、兩者の敎の基本を明らかにせば決して相撞着しないのみならず、兩方共に『信仰行爲を離るれば死』ぬると云ふ立場にあつたのであります。敎師は宜しく次の二點を明白に敎へねばなりませぬ。

羅馬三〇二四、二八　以弗所二〇七—九　提多三〇四—七

(一)私共は決して自分の行爲即ち功績に依つて救はれるのでなく、主キリストの御行爲と神の恩惠とに依つて救はれるのである事。

以賽亞三五〇八

(二)主キリストの受肉降誕、贖罪の死、主の復活、昇天、仲保及び聖靈降臨は其の目的、私共をして罪に死に「義に從ふて」生かしむるに在りて主は今も其の御目的を有つて居給ふ事。私共が『キリストに在り』又『主と共なる』は眞に聖き交際であります。

羅馬六〇　哥林多後五〇一五　加拉太二〇二十

主キリストが十字架と其の苦難に由りて私共の爲め勝ち得給ふた救濟は、眞に神が自由に私共に與へ給ふ賜で、私共は是を受けて必ず適當に用ひねばなりませぬ。主が私共の爲めになし給ふた事は私共が之を行ひ全うせねばなりませぬ。故に主が眞の使徒たる證として從順を重んじ給ひ、かつ從順なる者には特別の恩惠を與へ、更に進んだ深き智識を示し、一層親しく主自らを現はす事を約束し給ふたのは當然と思はれます。

腓立比二〇十二、十三　約翰十四〇十五、廿一、廿三　約翰七〇十七

(此處にて聖三位一體の信仰の全く實際的である事を注意するが必要であります)。

馬拉基一〇六

(一)父なる神。一度洗禮に由りて神の子供とせられた私共は、元の儘の我がまゝな利己的の生涯を送つてはなりませぬ。神より與へられ

約翰壹三〇一　路加二〇四九　馬太三〇十七　帖撒前四〇一　希伯來十一〇五　詩四十〇七、八

た特權が大なれば大いほど責任も隨つて大いなものであります。私共は完全な子なる神キリストの模範に倣ひ、父なる神の御業を務め神の御心に適ふものとならねばなりませぬ。又主は『死に至るまで從ひ十字架の死をさへ受くるに至れり』と腓立比書にある如く終りまで忍び給ひましたから、私共は如何なる價を拂ふても神の聖旨を喜んで爲すべきであります。

使徒二七〇二三　哥林多前六〇十九　哥林多後五〇十四　馬太十一〇三　聖範第三章五節參照

(二)子なる神。 救主の『主』と云ふ語は私共が從順に仕へ奉つるべきものであるを現はして居ます。封建時代の武士は其の主君に生命を献げて仕へました。「我が屬する處、我が事ふる處は」主なるキリストで「汝等は汝等のものにあらず」。主が私共を贖ひ給ふた値の大なるをおぼへて凡ての信者は『キリストの愛我を勵ませり』と叫ぶに至らねばなりませぬ。而も主キリストに事ふる爲めに私共の負ふべき荷は輕いものであると仰せられました。即ち主を愛するは全く主に献身して犧牲となるの意味である故、重荷を感じないのであります。愛の使徒なる聖ヨハネは長い一生の經驗より證言して『神の誡を守るは是れ即ち神を愛するなり、其の誡は難からず』と言ひました。

約翰壹五〇三　以弗所三〇一六　加拉太五〇一六、二十二、廿三　提多二〇十四　彼得前一〇十五、十六　同後一〇四

(三)聖靈なる神。 私共は極力弱き者でありますが、聖靈なる神を信ずるに由りて神の聖旨を行ふ事が出來るのであります。私共は「聖靈に由りて『剛健にせられ』る事が出來ます」。即ち能力と永久に燃ゆる愛と奉仕を願ふ心とを得る秘訣が此處にあります。神が私共を招いて洗禮の約束に入れしめ給ふは、決して私共をして以前と同じく不完全不充分な此の世に心を奪はれつゝ今後の生涯を送らせん爲ではなく、全く高貴な者と成り變り、潔き生涯に入らしめんが爲であります。（パウロの書翰全般參照）

十誡の由來

私共は前に既に從順の基く所を研究しましたから、進んで其の標準

出十九〇

を研究すべき順序でありますが、其の前に一言十戒の起原に就て申しませう。今より略三千二百年前ユダヤ民族の祖先がモーセに率ゐられてエジプトを出でカナンの地に至る途中、シナイ山の邊に一年間ばかり止り神より種々な御教を受けました。其の時に彼等は極めて壯嚴なる方法を以て口づから此の十戒を授けられ、後に之を二つの石の板に書して賜はりました。此の十戒はモーセの他の誡律と全く異り唯だ一時ユダヤ國民の爲めに下されたのみでなく、永遠に萬國民にかかはれるもので、後に主キリスト及び御弟子等が是が意味を強めて靈的のものと爲し、實際に深且つ大なる意味あることを示し給ひました。

羅馬七〇十二

私共が聖書を貴むのも之に依りて神の聖旨を學び得るからで、其中には『聖く公義しく且つ善なる」律法が多く錄されてあります。

良心

（正邪を判ずる本能）

昔時も今日と同じく主キリストの教訓を全く耳にせぬ人々がありました。而も其の人々が善を好み惡を憎み、道德上勝れた考を有つて居ました、例へばソクラテス、釋迦、プラトー、孟子等の聖賢は皆さうであります。道德上非常に高い點に達した人は勿論、無教育の下級民の間にも道德の觀念がある事は明白であります。且つ世界の國々の倫理が其の根本に於て一致するのは特に顯著なる事實であります。聖パウロも神を知らざる異邦人の中にも『彼等の心に錄されたる律法の工きを表はす』ものある事を認めて之を賞讃し、自然の本性（此の善き性質は神が御自身の性質を與へ給ふたものであります）によりてユダヤ人に與へられた聖き律法に適ふ事を行ふた異邦人を賞めて居ます。唯に特別なる智慧と力を與へられた賢哲のみならず、凡ての人が皆その心中に深く潛んで居る默せしめ難き强き聲で命令を下す判官、即ち「良心」を有つて居ます。然し乍ら良心の律法のみではまだ充分でありません、唯だ良心にのみ全く依賴して安心する事は出來ませぬ、良

羅馬二〇十四、十五

創一〇二六、七

心の聲は神の正義に適ふ聲でありますが、充分明瞭な聲ではありません。之は他の力と同じく四圍の境遇、教育の程度、訓練の有無等に從つて變化するものであります。實際私共の祖先も私共も世間の人の爲す事であるからと云ふ都合よき遁辭の下に、善惡を誤つた標準に從ふたり、低き理想に滿足して、下劣なる模範に倣ふて居ります。故に之を高きに引き上げんが爲めには個人の考や公衆の意見でなく、何か眞の尺度となるべき高い明らかな威權ある標準が必要であります。而して神は舊新約聖書の中に此の理想的標準を示し給ひました。

馬太五〇十七

キリストと十誡

主イエスは唯だユダヤ國民にのみならず、佛教徒、神教徒、儒教徒、哲學者、科學者たちの不完全な思想智識を全うし、私どもの特別なる要求を充し、私共の言ふべからざる憧憬の念を滿足させる樣に舊約の教を成就するために來給ひました。主は舊約の教を取りて之れに新なる生命と意義とを加へ、之を破棄せずして却つて完成し給ふたのであります。主は十誡を說明して私共の爲め唯だ一通りの規則としてゞなく、生命に導く原則として之を守らせ給ふのであります。故に唯だ言葉のみを見ず其の精神の高く深きを思ふ樣にと教へ給ひました。此の十誡は深く究むれば究むるほど其の意義の甚宏く高く深い事が分ります。主が說明し給ふた十戒中の個條は左の如くであります。即ち第三の戒(馬太五〇三十三—三十七)。第四の誡(馬太十二〇一—十三)。第五の誡(馬太十五〇三—九)。第六の誡(馬太五〇二十一—二十六)。第七の誡(馬太五〇二十七—三十二)であります。それ故に公會問答に於ては各誡の主意を取つて之を實際生活に當てはめてあります。私共は各自の國土、境遇等に從ひ、各自の遭遇する誘惑に應じて之れを應用せねばなりませぬ。

約翰十三〇十七

彼得前二〇二十一—廿三

主イエスの御模範。主イエスは唯御言を以て教を垂れ給ふたのみ

約翰八〇四六　詩四十〇七、八　馬太五〇四四　路加九〇五一—五六、二三〇三四

ならず、その御生涯全體が私共の模範であります。主は唯だ斯の如くせよと敎へ給ふのみでなく、自ら行ふて完全な模範を示し給ふたのであります(例へば最も困難にして稀に見る處の敵を恕す德の如きをも自ら實行し給ひました)。

舊約と新約との差異

馬太二二〇三五—四十　羅馬十三〇十　加拉太五〇十四　提摩太前一〇五

舊約の十誡は殆ど凡て消極的で、罪を犯す事を禁じた狹く嚴酷なものと思はれます。之に反して新約にては、イエスキリスト及び御弟子等は積極的の德(例へば愛せよ、祝せよ、祈禱せよなど)を命じ給ひ(公會問答にある十誡の說明も積極的に出來て居ります)舊約に於けるよりも非常に廣く慈悲深きものとせられました。主イエスは古の禁止的の律法を「愛」てふ語、即ち神に對するの愛と人に對するの愛を以て蓋ひ給ひました。この愛の精神は新約の大特徵であります。主は舊約の消極的な儀文を取つて愛を以て是れを行ふべきを敎へ給ひ、愛を凡ての誡の首となし給ひました。『愛は律法を全うす』るものであります。聖書を通じて道德の敎の進歩の跡が明らかに認められます。神は人々が了解する事の出來る範圍に於て當時の人々に敎へ給ふたのであります故に、或る點までは舊約の標準は新約の如く高く無いと云ふ事は認めずに居られません。然れば私共は十誡や其の他の新約の誡命をば(イ)主の御生涯と聖言に從ひ(ロ)主より種々なる思想、考案を受けて解釋し應用して、實行の花と果實とを示したる御弟子等の勸に從ひ新約の完全な光に照して之を悟らねばなりませぬ。

出埃及記廿〇二　馬太二二〇三七—四十

十誡の內容

十誡の內容は之れを二つに分つ事が出來ます、即ち第一より第四までの誡は神に對する務。第五より第十までの誡は隣人に對する務で、主イエスも神に對する愛と人に對する愛として說明し給ひました。

『我は汝の神エホバ汝をエジプトの地、其の奴隷たる家より導き出せし者なり』とあります。古は神が人々に恐怖の念を抱かしめ給ふたと思ふは誤りであります。『我は汝の神……(エヂプトより救ひ出し給ひた事)』と云ふ聖言の中にその深き御慈愛を認むる事が出來ます。神は誡命を下し給ふに先だち、先づ御自分が世人の爲めに大なる事を爲し給ふた事を思ひ起さしめ給ふて、イスラエル人の心に感謝と愛を呼び起し、喜んで聖言を受けて守らせやうと爲し給ひました。神は何人にも右の方法を用ひ給ひます。キリストの救に於ても、第一に罪の絆を脱せしめ、新たなる生命を與へ、其の次に私共の奉仕を受け給ふのが順序であります。

十誡の各條は新禱書二百七十頁以下にあり參照すべし。

神に對する務

第一誡—第四誡。

【第一誡】。之は凡ての誡の基礎で、唯一の眞の神に對する信仰を顯はし、私共と神との正しき關係を敎ふるものであります(宇宙間にも、私共の心中にも、此の眞神の外に他のものを神として入るゝ餘地がありません)。

明治天皇陛下が「朕を神とする勿れ」と仰せられ給ふたに對して私共は深く感謝せねばなりませぬ。然し他の神を拜するを禁ぜられた私共も、ともすれば心の中に神に等しきものを入れる誘惑に遭ふ事があります。之は實に恐るべき事であります。神のみが私共の最高の尊敬と最大の愛を捧げ奉るべき筈のものであります。然らば私共が神を愛する愛よりも我子供を愛する方が強きか、或は他に強い情の我が心の中にあるを悟つたならば如何すべきでありませうか。私共は勉めて其の愛を弱くするか、若くは之を制すべきでありませう

か。否『愛は神のもの』であるから私共は如何程愛しても愛し過ぎる事はないのであります。唯聖靈なる神に祈つて神に對するの愛を羅馬五〇 増し強め給はん事を願ふべきであります。此の世の愛を基礎として段々天に就ける高き愛に向て進歩する樣にして、此の世に就ける愛が決して私共のつまづきにならぬ樣力めねばなりません。さて此の誡を破る者は如何なる人でありませうか。

(イ)眞の神の如き力を有せりと思はるゝ他の神佛を信じ、又英雄聖賢を神として拜する者。

(ロ)占卜、魔術、神託等を信じて之に依賴する者。

(ハ)神よりも朋友、名譽、信用、學問、富等に賴る者。

(ニ)其何たるを問はず、心の内に秘れたる偶像を入れ置く者。(詩四四〇二十二十一、以西結十四〇三、四、哥前十〇十四、約翰壹五〇二一等は未信者の爲めでなく基督信者の爲に記されたものであります)。

『精神を盡し意思を盡し神を愛す』羅馬五〇 とは智慧、意志、感情を以て誠心誠意神を愛するの意であります。勿論愛は強ゆる事の出來ぬものでありますが、若し私共が心から神を愛し其の誡を守らんと欲するならば約翰一〇十八 其の愛が聖靈の助けにより必ず燃え立つに相違ありません。

【第二誡】。之は神に對し眞と靈を以て禮拜する事で、第一誡は重に私共の心に關する事でありますが第二誡は重に禮拜に關するのであります。神は靈であつて決して人に見ゆるものでありませぬ。其れ故眞に神に似たものを作る事は不可能であります。勿論主イエスの繪姿や彫像等多く作られますが、是は大切に保存し恭しく取扱ひますが決して是を禮拜し、之れに跪伏し事ふる事は致しません。神は既に古に於て右の眞理を敎へんとて此の十誡をイスラエル人に授け給ふ時にも聖聲を聞かしめ給ひましたが、聖姿を人の目に顯はし給ひませんでした。又イスラエル人がシナイ山に止れる時、神の命に從ひ禮拜と申命記四〇十五—十九

申命記四十九章
申命記十八章七—一四

犧牲を捧ぐる爲に建てた幕屋に於ても、其の後エルサレムの殿に於ても神は聖姿を現はし給ふた事はありませぬ。

『上は天にあるもの』とは日、月、星辰、雷等をいひ『下は地に在るもの』とは人、動物、植物、山川、昆蟲等にして、『地の下の水の中に在るもの』とは魚、水蛇等であります。イスラエル人はエジプトの地に居つた時に此等の禮拜せらるゝを見、又其仲間に這入つて太陽、月、ナイル河及び生きて居る牛、鰐、魚、昆蟲等の動物を其偶像と共に拜んだのであります。然し人の工なる繪や彫刻は一切禁じ給ふた事ではありません、是等も神が人に賜ふ賜物の中であります。美術上の聖き象徴(例へば聖靈を表はす鳩の如きは)大に私共の信仰を助けるものでありますが、是等は決して禮拜を捧ぐる目的としてはなりませぬ。其の他眞の神に捧ぐる樣な禮拜を神社佛閣に向て捧ぐべきではありませぬ。又(一家の主人ならば)佛檀や神棚を据え置てはなりませぬ、又よしや他の人々を喜ばす爲めにもせよ、神社佛閣に物を捧げ、或ひは葬式の時棺前や墓前に香を捧げるも禮拜の徴であるから爲しては善くない事であります。古代多くの信者が異教の神に香を捧げざりしため、生命を失ひました。今日に於ても印度や其の他の處で此樣な事の爲にやはり生命を失ふものが澤山あります。又私共は他の宗教の祭に加はるべき筈で無いのに提灯等をかゝげ、或は町内の者を憚つて祭禮等の費用を出すなどは必ず、之を避けねばなりませぬ。此の樣な困難の時は是れ即ち神の聖名を現はし、主に忠實なるによりて主の榮光を現はす好機會であると考へねばなりません。若し之が爲め迫害を受くる事あらば、更に勇氣を出して主に賴り、之を忍ぶ方がよろしい。若し何處までも堅く信仰に立つならば、間もなく困難は去り益々主の恩惠に浴するに相違ありません。又弱き信仰の者は之に因りて勵されて、助けを受くる事となりませう。私共は斯る場合に神の御導きと光明を祈り、求めると同

民二五〇
十一、十

列王上十三
九〇十
哥林多後十二

以賽亞四十
二〇八

時に、他人の感情を害せぬ様何處迄も親切に柔和に振舞ふべきであります。未信者は私共の様に神に就ける知識も信仰もなき故に私共の信仰を見て初めは驚き、怒り、誤解する事あるは決して不思議でありませんから、常に之を記憶して置ねばなりませぬ。

妬む神。 妬むと云ふ語は一般に悪い意味に用ひられます。人の妬みは大抵は少くとも愛の承認を求めても得ない寂しみの感情で、或は原因の正しい義の怒りを指すこともあります。之れ丈けならば悪い事はありません。然し妬には多くの場合猜疑、憎悪、利己の情が伴ふものであります。此處に錄してある妬むと云ふ語は(多分他に之を表はすに滿足な言が無い爲め)善き意味だけで用ひたものであります。之は神が決して二心を許し給はずして己と競ふものを許し給はぬと云ふ意味で、神の愛と義及び神の私共に對する正當な要求を表はすのであります。神は私共をして忠誠を捧げて唯神のみを禮拜し決して他の

以賽亞四十八〇四、十九、二

ものに之れを捧げしめぬ様にし給ふ權威があります。故に若し私共が他の神佛等を信じ之を拜するならば、そは必ず主の聖旨を痛め、又恐るべき罪惡を犯す事となり遂に私共を亡すに至るを主は能く知りて私共に斯る大罪を犯す事なからしめ給ふのであります。主は私共の全身全靈を捧げて主を愛する事を要求し、斯くする迄は滿足し給はぬのであります。此の「神の妬」は如何なる例を以つてしても充分に說明する事は出來ませんが、聖書の中に、夫が其の妻に對する權利若くは兩親が其の子供を潔く正しく育て上げる權利等に比較してあります。即ち此の「妬」と云ふ語は傷つけられた愛と義の怒との最高き意味を表はして居ります。

罪を子に云々。 之は罪の結果をいふたもので、親の罪によりて子も罪人となるといふのではありませぬ、而も其の罪の結果も一時的のもので永遠に子孫に及ぶと云ふのではありませぬ。親の罪の爲に子が

苦難を受けるのを見ねばならぬのは、確かに親が自分の罪の爲めに蒙る苦しい罰の一部であります。子が親らぬのは親には如何ばかり辛い事であるか分りません。其れ故之が自然に親たる者をして罪を遠ざけ罪を犯さない樣に努めしむる事となります。親の不道德なる行爲、飲酒浪費、負債、短氣等の爲めに子が其の惡しき結果を受くる事は屢々世に起る事で、是れ現在親の罪が後日子供の苦痛になる事を示すものであります、而して家庭に於ける感化が子孫に與へる影響は實に恐しいものであります、例へば惡癖、意志の薄弱、疾病、貧困、愚鈍等の子供の出來るは皆家庭の惡感化に基く事が多くあります。而も多くの親等が其の責任の大なる事を悟らず、極些少の秘れたる罪も尙ほ子孫の運命に大影響を及ぼす事を自覺致しません、是れ實に悲しむべき事であります。然し親の罪の爲めに子が神より捨らるゝ事はありませぬ。加之神の恩惠によりて祖先の罪の報や、惡しき躾の結果を免れ或は之に打勝つ事が出來るのであります。神は絶體に義であり、完全に愛であります。神の目には私共を皆貴重な者と見給ひまして、常に私共に助けを與へ給ふのであります。(嘆願の「主よ我等と先祖との咎を想ひ給ふ事なく又我等の罪を罰し給ふ事勿れ」參照)。

此次の聖語は神が信者の子供に與へ給ふ恩惠を示したもので、其の恩惠は實に大なるものであります。罪惡の報は三、四代に及ぶだけで其れ以上に及びませんが、神を愛し其の誡を守る者の受る恩惠が千代に至ることを錄してあります。即ち恩惠は審判よりも遙かに廣大であります。私共が善い兩親や祖先を持つて居れば深く感謝すべき事で私共の生涯を幸福有用なるものとし成功あらしむるものは、多くの點に於て(神の御祝福は、申すに及ばず)兩親や祖先の御蔭であります。之れを考へるならば私共も又子孫に此等の祝福を與へる樣大に努めね

ばなりません。

要するに此の第二誡は眞の靈的禮拜の大切な事を敎へます。私共は祈禱の方法を研究し、又私共の祈りが偶像信者の祈りに勝さるや否やを考ふる必要があります。實際偶像信者の中にも非常な熱心と謙遜と大なる忍耐を以て祈るものが多くあります。私共は自ら省みて勵まねばなりません。神は私共に對して更に多くの敬虔と誠意とを要求し給ふのであります。祈禱は唯だ口先や儀式でするのでなく全く心靈を捧げてするのでなければなりませぬ。

【第三誡】。神の聖名は唯に神御自身のみならず凡て神に關するものを現はすので御座います。私共は勉めて萬物の中に神を認め、神を歎美、崇敬する習慣を養ひ、人生の愚かな輕躁、浮薄な方面を見ずして、高尚熱誠な方面を見る樣に努むべきであります。

禮拜。此の第三誡は私共に深く敬虔と云ふ事を敎へるもので、私共

が公の禮拜を爲す時常に靜肅に秩序と恭敬を保たねばなりませぬ。敎會は祈りの家であるから、禮拜の中は素より、其の前後に於て或は大聲を發し或は無益の雜談を爲すべきでありません。故に禮拜に列する時は必ず早く會堂に入り心を靜め敬虔の念を厚くして、餘念なく神に禮拜し得るやう勉め且つ祈り求めねばなりません。又常に馬太十八〇廿の『我も其中に在ればなり』の聖言を記憶して居ることは必要であります。佛敎徒は能く默想や思想の統一などを勉めますが、基督信者も常に思想の統一、注意の集中を勉めねばなりません。特に禮拜の時には最も之が必要であります。常に斯く勉むるならば遂に容易に斯く爲し得る樣になりませう。又私共は密室の祈禱を爲すに常に敬虔の念を以て之を行ひ、決して輕卒にしたり或は唯習慣的にしたりせぬ樣注意せねばなりません。祈る時には私共の靈魂は上りて神に逢はんとし、神は私共に逢はんが爲めに來給ひます。故に祈禱は我等

馬太六〇、五七、十、五〇八、九

キリスト信徒に取りて大なる深い壯嚴な喜びでなければなりません。

凡て宗教上の事には虛僞なき樣注意せねばなりません。形式ばかりの祈は敬虔の念を伴ひません。故に若し己の罪を掩ひかくす爲め、己を高くする爲め、或は利己の目的を達する方便として宗教を利用するならば、其の人は僞善者であります。而もキリストは僞善者を最も嚴しく譴責し給ひました。(僞善者と云ふ希臘語は「假面を被つた俳優」と云ふ意味である)。

神の聖言。 聖書は神の聖言を錄したもので、此によりて人が神を知り神を愛し聖名を崇むる樣に、神は御自身を其の中に顯はし給ふのであります。或人々は聖書を批判するに極めて自由の態度を以てし、己の思想に合はぬ點は排斥し去りますが、然し斯る事は神に對して非常な不敬であります。唯最も大切な事は、信者たる者誠心から聖語を尊む事であります。さすれば印刷した聖書をも注意して取扱ふ樣になる筈であります。諸學校に於て教育勅語を尊ぶのも陛下の御言であるからであります。之は私共信者が聖書に對する時の手本とすべき處であります。故に聖書を普通の教科書を取り扱ふ如く疊の上になげ、子供に玩ばせ、或は其の上に他の書籍品物等を置き、或は汚しなどするは極く善くない事であります。信者が斯る事に心づかず無頓着である爲め、却つて未信者から不思議がられ非難せらるゝ事があります。斯る事は單に形式であると云ふは大なる誤で、實は其人の心靈上に大なる關係を及ぼすのであります。

馬太五〇三三—三七雅各五〇十二

聖名。 幸に日本に於ては神の聖名を含む暴言はないが、怒りし時に念なき言語を用ゆる恐は無いと言はれませぬ。天使が萬軍の主、尊き救主、聖靈なる神に就て話す場合は如何でありますか(以賽亞六〇一—四の天使の壯嚴なる禮拜參照)。然るに動もすれば、罪に汚れた私共の口を以て神の尊き聖名を輕しく稱ふる事あるは實に恐れ多き事で

あります。信者の中にはキリストの聖名を口に稱ふる時頭を下げざる人があります。私共は頭を下げずとも心の内に必ず拜を爲すべきであります。親睦會や日常の談話に於て興を添へるため笑談に聖書の句を用ゆる如きは全然爲すべからざる事であります。又説教や禮拜式や會衆の祈等の批評を爲す如きも甚だ善しからぬ事であります。

『主は猥りに其名を言ふ者を罪なしとせざるなり』とあります。私共は唯消極的方面をのみ考へるのみでは充分でありません。主は『御名を聖と爲さしめ給へ』と祈る事を敎へ給ひました故に、私共は常に其の御名に適ふ榮光を主に歸して、主の聖名と聖言を愛せねばなりませぬ。舊約の聖徒は聖書の敎を深く愛しました(特に詩百十九參照)。

『第四誡』此の誡は私共に六日間働いて一日息めと敎へます。しかし一日神に仕ふれば、後は忘れても善いと云ふのでは決してありません。此中に日々忠實に主に事ふべき事をも含んであります。此處に

創世記二、三
出埃及十六、廿二、廿

『忘るゝ勿れ』と錄してありますは此の誡命が新しいものでなく、人類創造の始より敎へられたからであります。神が毎週私共に取らしめ給ふ安息を取らず、靈魂の食物を取らないならば、人の靈魂は饑ゑ衰へます。佛蘭西革命の時に一週間毎の安息日をやめて十日毎に一日休息することにしましたが不可能であつた爲に、又もとの如く一週間毎に休息いたしたと云ふ歷史上の實例があります。七日毎に一日の休息は醫學上より見ても健康維持の爲是非必要であると認められます、故にかくの如き安息は身と精神の爲に必要であります。この舊約の律法は嚴格であつたが主キリストの時代に至りては種々な規則が加へられて唯形式のみに走り、些細な事までも堅苦しく規定して、中には殆ど無稽の規則すら加へらるゝに至りました。然るに主キリストは安息日に病人を癒し慈悲の働きを爲すを許し給ふた爲めに、ユダヤ人に害を加へられ給ふ樣になつたのであります。

ユダヤ教の安息日は土曜日でありました。舊約聖書中に此の日を守る理由は二つ記されてあります。即ち

出埃及廿〇十一

一、神は六日(六時代)の間に一の特別な御働き(開闢)を爲し終へ給ふて七日目に安息し給ふた事。

申命五〇十五

勿論右の云ひ方は、勞働する人間の言を用ひ、神の御事を人の事に似せて記されてあります。とは云へ此内には大なる眞理が含まれてあります。其の眞理とは働きと安息は共に神聖なものであつて、兩者の平均を得る樣注意する事は、神の像に似せて創造せられし人々の爲す可き事であります。

二、イスラエル人は久しき間エジプトに於て、はげしき壓制の許に奴隷として苦みしが其の境遇より救ひ出されて安息を頂きし事の紀念であります。

主の御復活の後は、日曜日は主の御救ひの祝の日となりました。此の日は實に喜ばしい聖日であります。主イエスは此日に死より甦り給ひ、又一週間後の同じ日には主の御弟子達の多く集れる所に現れ給ひ、又ペンテコステの日曜日には聖禮を降し給ひました、之は決して猶太國民の爲のみではありません。神は萬民を創造し給ひ、キリストは萬民の爲に死より甦り給ひましたから、舊約にも新約にも敎へて居る一週間一日の安息と歡喜の日を守るは萬人の義務であります。而して世が益々忙しく、生存競爭が愈々激しくなるにつれて、凡ての人特に信者すら日曜日を守らぬやうになるのは實に殘念な事であります。日曜日は實に主の日であるにかゝはらず、己が好みに從つて或は仕事をし、又は遊びにふける等は聖日にかなはぬ事であります。信徒は成るべく主の御助により、最も高き理想を標準として、一般國民を神の望み給ふ其高さに引上げる樣つとゝめる義務があります。

約翰廿〇一、廿六徒二〇一

イザヤ五六〇二—七、五八〇十三

舊約書には、安息日を堅く守る者に對し恩惠の御約束がしるしてあ

ります。神はこの誡により私共に大なる祝福を與へ給ふのであるから、決して信徒がやむを得ず忍んで守らねばならぬものでなく、之を守るは自由の身となりて神に祈り神を讃美し聖名に適しき禮拜を捧げる事で來るべき週間に充分に働き得る新なる力を受くる大特權であることを自覺して喜びと感謝を以てなす筈であります。勿論現今の基督教の日曜日と古の安息日と全然同樣ではありません。私共は舊約時代の信徒の如く細かい規則を以て束縛せられず、大なる自由を與へられて居ります。然し之がために誡命の主意を忘るゝことなく、益々靈性のことに熱心にならねばなりませぬ。

さて主の日を守ることは。(一)肉體精神靈魂の健康の爲め缺くべからざるものであります。(二)神に對する愛と忠義の試驗であります。(三)天國の禮拜と安息とに對する準備であります。私共は日曜日を

(一)聖き日(二)休みの日となさねばなりません。

(一)聖き日とするは、日曜日の朝起きるとすぐ今日は主の日であると記憶し先づ教會に行く樣なすべき事であります。若やむを得ず行く事の出來ぬ場合には禮拜の時間を憶えて日課を讀み祈をなし他の聖徒と共に神のみまへに一つとなる事の出來るやう勉むべきであります、又時を作つて聖書を讀み讃美歌を歌ひ或は信仰の助となる書籍雜誌等を讀み靈性の修養をする事は大切であります、又子供のある家庭にては子供を日曜學校に送り又は美しき宗教的の談を聞かせ、共に歌をうたひ、又祝のしるしとして一寸した變つた御馳走でもして子供を喜こんで日曜日を樂しく過させる事は大切のことであります。又主に導かんと思ふ者あらば其人に聖書をとき聞かせ、若し遠方の人ならば(但し郵便局の人をも出來るだけ休ませるつもりで手紙を日曜日に認めても月曜日に出すやうにすることは最もよろし)手紙を書きおくるもよろしかるべく、或は悲しむ者、さむしき者を慰め、病人を見舞

ふなど慈悲の行爲をなし、又は靜かなる所へ行き靜かに一人祈りの中に神と交り默想をなし、或は美しき景色の所に友人を伴ひ行き自然を眺めて神を讃美するもよい事であります。

又日曜日に買物や多くの仕事をなす必要のなきやうに土曜日に充分に用意して置くことは大切であります。

時として日曜日に行ふてよきか惡いか分らないやうな事柄があります、そのやうな時には人々の考へも心も各々異なるもの故己の考を以つて一樣に他人を律する事は出來ません、故にかゝる場合には靜かに考へて神に祈るならば、神は必ず眞心の祈に答へて導きを與へ給ひます。家長たる者は家庭に規則を設け、多少の犧牲をはらつても主日を守る樣にすべきであります。

(二)休の日とするとは勞働を休み心身の休息をなす日とすべきを云ひます。之は最初は中々困難のやうでありますが、慣れるに隨つて苦

くないやうになります、この休むことは一寸損するかの如く思はれますが、そうではありません、却つて神の祝福を受けてとくとなります。

若し平常腦を用ふる人ならば、日曜日には成るべく之をやすめて何か全く變つたこと、例へば野外に杖をひき美しき天然の景色を賞讃し或は花をめで植木などの手入に樂しき時を過すもよろしかるべく、又身體を用ふる人は全く之をやすめ、精神上なにか有用な書物を讀むとか默想するとかは至極よろしい事であります。

私共は此日に下婢等にも餘分の仕事をさせず、出來るだけ休息を與へ、又賣物買物をせず接する人には成るべく仕事をさせぬやうに意を用ひ、火急の場合の外は此日に旅行などもせぬやうにすべきであります。

此の誡の中に「六日の間働きて」とありますが、此の働に就ての注意として序に二三のことをしるしませう、先づ凡て仕事は一定の時間に必

ず正確に始める事、其働に興味あるとなきを問はず必ず終りまで完全忠實になすこと、時間を空費せぬやう豫め能く順序を考へて計畫を立てること(然かし突然の用事起りて最初の計畫を行ふ能はざるとも失望すべからず)。

此の外一週間に一日の特別な聖日が必要なる如く、毎日若干の特別のしづかな聖き時間を守る事は最も必要であります、故に毎日一時間か、もしくは半時間或は多忙な人や、子供の多い人等は數分間でも怠らず神に祈り主と交り又聖書の意味を味ひて己が靈魂の餓を充さねばなりません。

人に對する務　第五誡—第十誡

歳	一六〇
以	二廿
弗	廿
所	六
提	〇
摩	一
太	三
路	五
加	四
五	〇
一	二
	〇

【第五誡】忠孝。今之を研究するに先ち誡の順序に就て考へねばなりません。即ち先づ神に對する務を敎へ、次に人に對する義務の中、第一位に錄されたのが此の忠孝の誡であります。世人やゝもすれば基督信者は兩親に對する義務を輕んずと考へますが、之は全く大なる誤解であります。信者は皆身上の者に對する義務を重んじます。就中兩親に對する務は聖書の中に繰返して敎へられてゐます。即ち兩親の恩を思ひ之れを感謝し、之れを愛し、之れを敬ひ尊ぶべきを敎へて居ります。又子供をは幼時より兩親の手助けを爲す樣に敎育せねばなりません。主イエス御自身もナザレに居給ふ時には父母に事へて其の手助けを爲し給ひし故、主に倣つて子供を敎育すべき筈であります。此の誡は唯に兩親のみならず凡て身上の者に對する務を敎ゆるもの

であります。

之を畧説すれば(一)兩親に等しき者、例へば養父母、義父母等。(二)祖先—私共は肉體も精神も祖先の御蔭による事非常に多大であります故、常に祖先の恩惠を思ひ之を記憶するのは最も大切であります。又死せし祖先を記念し花環を墓前に捧げ、或は記念の式を爲す等は至極よろしき事であります。信者の中には祖先の爲め又は死者の爲め何事をも爲すべからずと誤解する者ある由なれど、之は全くあやまりであります。(三)教師や主人や其の他の長者。(四)聖職。古來監督は神にある師父と稱せられた位であります。私共は教會の師たる人々に對し充分の尊敬を拂はねばなりませぬ。(五)政府及び其役人。(六)皇室。皇室に對する忠義に就ては聖書の中に繰返して教へてあります。私共は常に皇室を尊敬し、愛慕し、教會の禮拜及び私宅の祈りに於ても、天皇、皇后及び其の他皇室の爲めに誠心を以て祈らねばなりません。基督

テサロニ
ケ前五
十二、
十三〇
希伯來
〇七、
十七
羅馬十
〇七
十三
箴二十一、四—一〇七
彼得前二十一
十〇七十三—二一
提摩太前一、二

教の教義の中に忠孝の教は決して缺けて居ないのであります。神を
ば私共の王、私共の父として仕ふる私共は勿論此の世の王及び父母に
對して中心より愛敬を以て仕へねばならぬのであります。イスラエ
ルの最初の王サウロの爲に其の生命を奪はれんとしたダビデはなほ
王に忠義を盡した事は實に忠義の模範であります。又種々の困難を
忍んで孝道を全うしたヨセフやルツの如きは孝の模範であります。
之に反し忠孝の道に背いたアブサロムの無慘の死を遂げた事は私共
に忠孝の道に背かざる樣常に與へらるゝ警告であります。

【第六誡】 肉と靈に對する尊敬。此の誡は人の生命を保護し殺人を
禁じたのでありますが、然し單に殺人の行爲を禁じたのみでなく、行爲
の根本である心中の憎惡、怨恨等の念を取除くことを命ぜられたので
あります。未開時代には怒に任せて人を打ち死に至らしめた事は極
めて普通で、何人も別段之を怪みませんでした。然し現今は政府や社

馬太二
〇二
十一

撒母耳前十九、一五、〇一、廿一
撒母耳後十八、〇
廿三—十六、一〇、八
十四、十、九、十六、六、廿

會の刑罰、非難、排斥を恐れて斯る行爲を輕るゝ〳〵しく爲す者はありませぬ。實際私共は他人を殺すが如き事は殆どありませんが、今でも殺人の惡心が他の形を取つて現はれ出ることはあります、即ち短氣、激怒、嫉妬、輕蔑、他人の感情を害し、他人の幸福を削ぎ、或は他人の成功を妨げんとする心等は、皆其根底に於て殺人の心より現はれ出づるのである故、私共は常に斯る習慣、性癖に充分注意して警戒せねばなりません。要するに殺人は其の行爲に現はれたものゝみでなく(一)思想(約翰壹三〇十五)(二)言語(馬太五〇二十二)(三)行爲に於ける凡ての慘酷なる事は、皆此誡を犯す事となるのであります。右の外に他人の靈魂を殺す罪があります。惡魔は人の靈魂を傷はんと常に尋ね求めて居ります。加之自殺も自身を殺すのであるから一種の殺人であります。

約翰八〇四四彼得前八〇五

馬太五〇二八

【第七誡】 結婚の神聖なる事。此誡は家庭の清潔を保護し凡ての結婚の神聖なるものでなければならぬ事を命じ給ふたのであります。

哥林多前三〇十七以弗所五〇三、四、五

私共は神の聖靈に淨められて思も言語も行爲も共に淨くあらねばなりませぬ。斯くてこそ私共は日々高き品性に進む事を得るのであります。私共は萬事自ら制して己に克たんと勉め、決して情慾の捕虜とならぬやう常に神に祈りて御助けを願はねばなりませぬ。抑々私共の身體は私共のものでなく神のものである故に、決して情慾をして己に主たらしめて神の殿たる身體を汚してはなりませぬ。此の身體が神の靈化によりて益々高潔となり遂に神に肖るに至る事は私共の大なる希望で、此の希望を懷くに　りて自然と善良なる感化を受け、我が生活が向上して行くのであります。啻に兩性間の情慾ばかりでなく、飲食、睡眠に至るまで凡ての點に節制を要します。慾を縱にするは凡て罪である故、萬事に節制して神の榮光を顯はす樣に勉めねばなりませぬ。さて慾を節するには第一に意志の力が強くなければなりませぬ、故に私共は強き意志を養成するやう常に力を用ひねばなりませぬ。

哥林多前六〇十三—廿

約翰十一三〇二、三、

哥林多前九〇二五二七、十〇三一

意志の薄弱な者は如何ほど心に善を願ふとも直に情慾に打負けて何の甲斐もありません。抑も意志の力は神の私共人類に與へ給ふ大なる恩惠であります。此の大なる恩惠を等閑にせず充分大切に養成して堅固なる意志となし、以て慾を制し己に克ちて日々高潔の德を積まねばなりません。

信者の間に動もすれば禮儀作法等を不必要と考へる人もあります が、信者にても相愛し相親しんで居さへすれば禮儀作法を亂しても可いなどゝ思ふは大變な間違であります。信者ならば尙一層禮讓に厚く作法を重んじねばなりませぬ。凡て信者たるものゝ服裝及び起居、動作、皆中庸を得る樣にあり度いものであります。

節制を重んずるに就き特に私共の注意を要するは讀物であります。近時印刷術が進歩し世人の讀書趣味の增すに隨ひ種々如何はしい書籍雜誌が澤山に世に出る樣になりました。善しからぬ讀物の爲め害を受ける事如何ほど多いか到底計り知るべからざる程であります。世の墮落の淵に沈み行く多くの男女は、最初如何はしい讀物の感化によつて知らず〳〵の內に罪の道に這入つたのであります。キリストを主と仰ぐ私共は充分此の點に注意せねばなりませぬ。私共は凡ての點に於て神の恩惠に由て高尙なる性質を養成し得るやう、之が爲に努力して萬事に世人の模範となる樣にせねばなりませぬ。

さて神によれる結婚は實に幸福であります。共に主を讃め、主をたゝへ、主の聖名を崇めて喜びつゝ神より賜はる恩惠と平和の內に日を過す事が出來るのであります。宗敎は家庭に根底を据ゑて其處に力を有する樣にならねば其の美を充分に發揮する事は困難であります。此の世の中に主によりて結ばれた眞の信者の家庭が益々多くなればなるほど、神の榮光が愈々顯はれるのでありますから、私共は地のはて迄も遍く神を畏るゝ家庭の作らるゝ事を望んで止まぬのであります。

哥後六〇十四—十八

哥羅西三〇三

斯く考へ來れば益々信者と未信者間の結婚の不完全にして種々の危險と悲哀の必ず之に伴ふ事が知れるのであります。夫婦は一體で、其の交際は最も親密にして最も高尚でなければなりません。然るに同じ信仰と主義を持たない男女の結婚は眞の一致をなす事、素より不可能で、大なる不平不滿の生ずることは避くべからざる事であります。若しも夫妻の一方が神を信じ他の一方が未信者ならば、信者の方はキリストを生涯の中心となし、キリストの爲めに働く事を喜びとなし、常に神と深い潔き交際を爲して日を送り、其の生命はキリストと共に神の中に藏れて居ると云ふ美しい生活を送つて居りますに、未信者の方は全く此等の眞味を解する事出來ず、常に局外者の感を持つて居るならば萬事に意志疏通せず、自然寂寞の思ひが起ります。結婚後に信仰に導く事が出來るだらうなどゝの考へにたよりて結婚する事は眞の信者として順序を顚倒した事で危險であります。斯る場合に立入つた後ならば祈つて他の一人を悔改めに導く外に致し方ありません。

哥林多後六〇十四—七〇廿九以弗所五—廿三〇廿三

現今の日本に於て信者が未信者と結婚せぬ事は多少困難であるかも知れませんが、聖書の内にも『不信者と偶ふ勿れ』『唯だ主にある者にのみ適く可し』等の敎訓がありますから如何なる困難あるも未信者と結婚してはなりません。

敎師は自分の指導する志願者に特に此の點に就き懇切明瞭に說き聞せ、わかき婦人等にして此の問題が受洗後に起る事があつても一歩も讓歩せず、其の信仰、其の主義を堅牢に保つ事が出來る樣に敎へ、敎師自らも祈を以て助ける事が大切であります。

【第八誡】 此の誡は財產を保護するもので、唯だ有形の物に就てのみでなく、社會萬般の事に正直なるべき事を敎へ給ふた律法であります。即ち、二例をひけば(イ)政府に對しては租稅等の事に就き決して不正直の事をなさず(ロ)雇人としては忠實に業務を勉め、主人の信用に背かぬ

申命記廿四〇十四、十五

様一意主人の爲めを思ひ、主人は正しく雇人に給金を支拂ひ、決して其の間に無理の事ない様にすべき事を命じ給ふのであります。此處に『盗む勿れ』とありますは、唯だ他人の品物を盗む事を禁じ給ふたのみでありませぬ。實際に於て私共が他人の品物を盗む様な事は殆んど無いのでありますが、然し深く考へて見れば商業上の取引に於ても他人との約束に於ても、常に正直を旨とし約束を嚴守せねばならぬ時に猥りに虚僞を用ひ或は責務を履行せぬ等は盗むと同じ事であります。特に主を信ずる者は必ず精密に責務を果さねばなりませぬ。昔し日本の武士が一言の責任を重んじて生命を賭して之れが遂行に努めた等は實に信者の模範とすべき事であります。若し私共が少しでも己の責任を顧みない事があるならば、之が爲めに神の聖名を汚す事如何許であるか分りませんから、此の點にも充分注意せねばなりません。又此の外贅澤な生涯を送り、金錢、時間を浪費し、怠惰にして他人の厄介となり、或は他人の仕事の妨害となる等は同じく盗むと同じであります。借りたる金錢、物品を正しく返濟せず、或は之を粗末にするも同様であります。而して『カイザルの物はカイザルに納め神の物は神に納めよ』との主の教へに從ひ、私共も昔しのユダヤ人の様に收入の十分の一を神に納めるならば大變幸ひであると思ひます。斯くすれば神は之に對し必ず其の報を惜しみ給ふ事はありませぬ。金錢を費やすにも、常に神の聖名と榮光の爲めに用ひ度いものであります。大きな事ばかりでなく、凡ての小事にも忠なるものとならねばなりませぬ。

路加十六〇十

【第九誡】 此の誡は人の名譽を保護するもので私共に誠實と深切とを教へ、殊に言語を愼しみ決して人を非難する事なき様に命じ給ふたのであります。之を詳しく言へば(イ)虚僞を云ふ事を止め(ロ)他人の名譽を害する事、殊に眞實か否かゞ明らかならぬ話を爲す事を愼み(ハ)眞實の事にでも誇大に語り傳ふことなく(ニ)或は他人が受くべからざる

路加二十〇二五

利二七〇卅

以弗所四〇二五

哥林多前十三〇五

疑を受くる時に之が爲めに辨明に努めねばなりませぬ。此等をなさぐるは取も直さず此の誡を犯す事であります。私共は『愛は人の惡を思はず』との聖語を記憶して何處までも愛を以て人に接し、決して人の惡をのみ見てはなりません。されば此の誡より私共の學ぶべき處は(一)常に眞理を知り眞理を口にする樣注意すべき事。されば人の長所、善處を見ることを勉め、人を批評するが如き事には深く注意せねばなりませぬ。(二)如何なる場合にても必ず正しき者の味方たるべき事。神は常に正しき者の味方であります故、神に屬ける私共も同樣でなければなりません。(三)蔭にて人の惡しき事を話さるゝ時は成るべく辯護の位置に立つべき事であります。虛僞の證を立てる事は極小さい事の樣でありますが、虛僞の證を以てナボテを殺さしめたイゼベルは遂に神の怒りに觸れて無慘の死を遂げました。又虛僞の證は罪なき私共の主、神の聖子イエスを十字架上に死せしめ奉るに至り、御弟

列王上二十一〇下九
三七〇三王十一
馬太二六
五九一
六

使徒六〇十一—十四
路加十五十二
帖撒前四一、十〇二十
帖撒後三十一、十二
提摩太前六一
十六〇
希來十五〇三
列王上二十一〇
二七〇二王十五
撒母耳後十一〇

子ステパノも虛僞の證によりて石にて打殺されるに至つたのであります。實に虛僞の證は恐るべきものであります。私共は充分注意して此の誡を守らねなりませぬ。

【第十誡】 心中の思想のみに關する誡は十誡中に此の誡あるばかりであります。此は凡て他人の物、例へば財產、地位、權力等を得たしとの不法の慾、即ち貪慾、嫉妬、利己等の慾を禁じ給ふたのであります。又己自ら働いて自活の道を立つる事を壓ひ、他人の助けに依賴して苦勞せずして生活せんと願ふ樣な事をも禁じ給ふたのであります。此の誡に由りて私共は足る事を知り我慾を制する事を敎へられます。アハブ王もナボテの葡萄園を貪ぼる慾を起し、ゲハジやユダも財寶を貪りし爲め恐るべき報を受くるに至り、ダビデの如きすら此の貪りの爲めに大罪を犯しました。私共は先づ自ら働く事を習ひ、勤勉を以て自活するのみでなく、他の艱める人を助くる位の心懸をば常に抱いて『天

羅馬八〇
二―十
加拉太
五〇
三、二二
約翰十二
〇一―八

に財寶を蓄ふる』事を勵まねばなりませぬ。

以上十誡に就て大要を述べたのでありますから、公會問答にある十誡の説明を研究する事は必要であります。さて右の如き高い標準を如何して日常の生活に守り行ふ事が出來ませうか、私共は次の三つを頼りて之を立派に行ひ得るのであります。

(一)私共をして神を喜ばせ、正義を愛せしめ、又善き果を結ばせ給ふ聖靈なる神の御働を頼むこと。

(二)私共が常に主キリストの中に居る事。

(三)常に祈禱する事。

斯くして私共は日々益々神に近く進みて聖化された生涯に入る事が出來るのであります。十誡を完全に守り、神の聖旨を餘す處なく行ひ給ふた主キリストの聖手に縋り、聖足の跡を踏みて常に神の愛に居る事を勉めたいものであります。

主の禱

祈禱と禮拜

(詩九十五篇)

馬可六〇
三十
腓立比四
〇六、七

神は私共の造り主、私共を治むる王、私共の慈愛深き天の父で在します故、神を禮拜するは私共の義務であり又責任であります。私共が深く愛する人と共に居り、共に語ることは最も大なる樂しみであります。又信頼する人には自分の思考を腹藏なく語りて助と慰を求めます。斯と同じく神に禮拜する事も只義務であるばかりでなく又樂と喜であります。禮拜によりて己が心情を包まず神の聖前に吐露してこそ機に合ふ助となる恩惠を受ける事が出來るのであります。古の御弟子等が凡てを主に告げた如く今日の私共も胸の奥深き思も皆主の御前に申し述ぶべき筈であります。

祈禱とは神に近づき禮拜、感謝、願求を捧げることであります故、祈も、

感謝もなき生涯は神を離れた寂寞な淳滯不動睡が如き一生であります。

（馬可一〇三十五路加五〇十六、六〇十二、廿八、九）

すが、之に反し祈禱と感謝の生涯を送る人の心靈は常に強健で、日々信仰の道に進歩向上するものであります。祈禱に於て私共に示し給ふたキリストの模範は四福音書、殊に路加傳に多く見えます。古代の聖徒も祈りました事が多く記されてあります（舊約に於てアブラハム、モーセ、エリヤ、ダニエル等の如き、新約に於てもパウロの書簡の如きは美しい祈りに充ちて居ります）。

（傳道五〇路加十八、三、十四、馬可十一、廿四、一〇、羅各一〇、路加十八、六、一〇、ロマ十二、十二）

祈禱に就てのキリストの御教は馬太六〇五―十三、七〇七―十一、路加十八〇一―十四等の要點を説明すれば大なる助けとなります。キリストの御教によれば祈禱は左の事柄を要します。

（一）誠實　（二）靜肅　（三）敬虔　（四）謙遜　（五）信仰　（六）忍耐。

さて祈禱は誰に向つて祈るのでありませうか、其は勿論、父、子、聖靈なる三位一體の神に祈るのでありますが、普通は祈禱の大導師なる聖靈の御導きにより、子なる神を通して父なる神に祈るのであります。日々の祈禱が私共の心靈上に必要なるは恰も肉體に日々食物や空氣が必要なると同樣であります。朝夕は勿論、必要に應じて何時何處にても神に祈をなすは、私共の大なる助となり幸福となります。祈禱を爲すに必ずひざまづく必要はありません。種々家事にたづさはつて居る時、或は道をあるく時、人とお話をして居る時等にても秘かに心の內にて常に神に祈り、如何なる場合にも神の御手にすがりて行く事は幸ひな力ある生涯の秘訣であります。早禱には特に讃美と祈禱を重にし、晩禱には感謝と懺悔を重にすべき筈であります。朝は其の日を平安に有益に送る準備の爲めに神の御力を祈り、夕には過ぎし一日を顧みて其の日と己を神に委ねる樣にするならば必ず幸多く、悔のなき一日を送り得て神に感謝する事が出來ませう。

（羅馬八〇二、六、二七、猶太廿）

密室の祈禱には重に自分の言と主の禱を用ひませうが、其と共に時

時に用ひらるべき祈が多く本に記されてあります。一二の例を擧ぐれば祈禱書中の懺悔文、萬民の爲めの祈、感謝文、附錄の家族の爲めの祈禱等を用ひ、また詩篇にも祈禱、讃美の美はしき言が多くあるから、獨り祈禱する時に用ふる爲め豫め其處に標をつけるか或は別の紙に寫し置て使用するも良しく、又讃美歌中にも祈禱として最も適はしきものが澤山あれば、此等を隨意に應用して各人の眞心より祈らせる事が大切であります。なほ祈禱の時には他人の事を忘れず其が爲に祈る樣導かねばなりません。又能ふべくは聖書を熟讀玩味して後祈るやう勉めるならば、たとひ最初は別に祈る事柄も感謝すべき事もない樣に思はるゝとも、次第に祈るべき題目が與へられ種々なる思想が生じて非常な助けとなります。

主の禱

馬太六〇
路加十一
〇二

此の禱を志願者に敎ふる目的は之を祈禱の模範として尊び愛することを學ばせるためであります。詳しく云はば此の祈を度々用ふる事を厭はざるのみか反つて益々敬虔の念と確固たる目的と崇高なる信仰を得て望みと愛と確信とを以て此の禱を唱へ得る樣にならしめる爲であります。

此の禱は主キリストより私共に與へ給ふた賜物ゆゑ、殊に尊いものであります。主は之を祈禱の模範として敎へ給ひ常に實地に用ひし め給ふたのであります。此は七つの項目を包含して、其の初の三つは神の榮光と權威の爲めに祈り、終りの四つは私共に必須のものを祈る爲であります。始めの部分は凡ての中、最も大なる天の事に關し、後の部分は地上に於ける個人の必要に關する祈りであります。

〇主の禱の解說

【天に在す】とは敬虔の念を表はす語で、神は限なく尊き主であると

共に、又私共に最も近く在まし給ふ。此の神の御足下に心を卑くして平伏すとの意を含むのであります。

【我等の】 單數を用ひず故らに複數の我等を用ひたるは、唯に自分のみならず他人の爲めにも等しく祈ることを記憶させるのであります。即ち我等各自は神の大なる家族の一人として御前に來り、寛大にして愛に充てる心を以て己のみならず、神の大家族に屬する凡ての人の爲に祈り求むとの意であります。

【父よ】 此は實に美しく懷しい御稱號で、種々なる御名稱中の冠たるものと思はれます。此の御稱號を呼びて祈禱を始むれば當然私共の心より恐怖の念は去り、恰も肉體の父に對する如く憚らず臆せず聖前に出づることが出來るのであります。

【願くは御名を聖となさしめ給へ】 御名とは、神御自身と神に關する事とを意味します。今日幾許の人が心より神を崇め御名を敬まつて

此聖名ニツキ詳シキコトハ使徒信經ノ說明中ニ記セリ

居りませうか。願くは日曜日に敎會に於て禮拜するは勿論、他の日に於ても私共の生涯、思想と言語と行爲とに於て神に對し適當なる禮拜を捧げ、凡ての榮光を主に歸し奉り、家庭及び學校に於ても、政治にも文學にも又公私のあらゆる場處に於ても、神の御名の崇め尊まれ給ふ樣に切に祈る事を勉めねばなりません。

【御國を來らしめ給へ】 御國とは、聖書によれば四樣の意味に解する事が出來ます、即ち(一)天に在る神の聖位(二)基督の地上の敎會(三)人の心靈に於ける神の御支配、(四)未來の完全なる王國であります。私共は今此の御國の爲めに準備して其來るを待ちつゝあるのであります。さらば私共が御國と云ふ時に、右の意味を皆含ませて、(一)此の世は聖き天國の如くなる樣、(二)キリスト敎の擴張するやう、(三)各自の心靈を愛の王たる神が統治し給ふ樣、(四)榮光の君キリストの御再臨により御國の早く顯るゝ樣祈らねばなりません。

【御心を天に於ける如く地にも行はしめ給へ】 神の御心は私共に取りて平和と歡喜であります。願くは神の御心が私共によりて自己の爲め、世の爲めに普ねく行はれ得る樣に、私共は切に御心を知らんことを勉め、之を示さるゝ時には天使の爲す如く一意專心御心を喜び行ふやう祈りたいものであります。此の祈は又我儘と懶惰を防ぐ爲の祈りであります。時として神の御心を悟りて之を受け入るゝことが非常に難い事もありますが、斯る場合にゲッセマネに於ける主の御苦みを記憶するは、最も大なる奬勵となります。主は彼處にて大なる憂愁の下に度々之と同じ祈禱を献げ給ひました。我儘な我意を捨て主に倣つて終始神の御旨を己の意と爲さねばなりません。

馬太二六〇廿六—四四、

【我等の日用の糧を今日も與へ給へ】 此は私共の日々の食料の爲に極單純な供給を神に希願するのであります。此の中には唯に食事ばかりでなく一切の肉體の需用をも包含し、更に又高貴なる靈性を養ふ

羅馬十二〇二

爲に神の御惠みをも祈り求むるのであります。又之を以て貧困なる者、病める者、職を失ひし者、心に飢渴を感ずる人々の事をも記憶して神の御助を求むるのであります。神は信仰厚き子供等を忘れないと約束し給ひました。

馬太六〇二五—三四、

【我等に罪を犯す者を我等赦す如く我等の罪をも赦し給へ】 如何に立派な熱心な信者でも此の祈を捧げるのであります。日々知りつゝ或は知らずして罪を犯す不完全なる私共の爲に、此の祈のぞれ程必要であるかをキリストは能く知り給ふたのであります。人が潔きに進む程愈々些細な罪にも良心が非常に苦む樣になり、神の御赦を願はずしては片時も平安を得られぬ樣になるものであります。斯る場合には約翰壹書一章七、九、の尊き御約束を覺えて、神の御惠に感泣し、悔改の實を擧げる樣に心を盡さねばなりません。但し單に罪の罰を逃れんと欲する淺薄な利己心の爲めに御赦しを願ふのでなく、私共の(第一)希

雅各三〇二

雅各二〇十三、

罪と試みつきアダムエバの談の説明を見よ、

羅馬五〇三—五、雅各一〇二—四、十二—十五、

望する處は罪其ものを逃れんが爲め、即ち其汚と咎と力とより脱する事、(第二)神の私共との間のへだてを除いて頂き神との和ぎを得て、愛と平和の中に交る事の出來る、樣に願ふのであります。斯く私共は常に神の御赦を願はねばならぬものであるから、他人が私共に對して爲す罪や過失を赦すのは當然であります。「憐憫は審判に勝つ」。眞の救を祈り求むる者は必ず寛容と愛憐と同情と忍耐とを以て朋友、隣人の我に對する罪惡を赦すのであります。

【我等を試に遇はせず】 私共は神より豐かな赦をいたゞいても、復罪を犯す恐のあるものであります。人間が此の世にある間誘惑より全く離れる事は出來ません。日々の職務に當る時、會話の時、讀書の時苦痛をなめ愉快に遭遇する時など、凡ての場合に神が私共を訓練せんが爲め逢せ給ふ試誘の外に、惡魔が私共を惡に陷れんとする誘惑に出合ふのであります。主イエスでさへ試に出遇せ給ひました。其の時主

以弗所四〇二七、以弗所六〇十六

馬太廿六〇四十一、希伯來四十五、〇十六、

加拉一〇四、哥西一〇十三、

ヨハ子傳十七〇十五、羅馬十六、哥前十〇廿十三、十五〇五〇七、約壹四、五〇

は少しも惡魔に所を得させ給はず、聖書の御詞を用ひて惡魔に打ち勝ち給ひました。聖書の研究は誠に私共の大なる助であります。惡魔の火矢の飛び來る時に決して信仰の盾を忘れてはなりません。故に私共は其の樣な場合に己の弱きを充分承知して神の御指導と御保護を願はねばなりません。之はキリスト御自身の私共に對して仰せ給ひし御警告であります。

【惡より救ひ出し給へ】 此の祈は私共の周圍に吼る獅子の如く徧行りて居る惡魔の恐ろしき勢力より救はれん爲めの歎願であります。神の御旨により私共が試誘に逢ふを免れ得ずとも、主の御祐助により て惡より脱れ得る樣祈るのであります。されば免れる道、打ち勝つ方法は神によりて必ず與へられます。

【國も權も榮も世々に父の有なればなり】 最後に神を讃美する言葉を以て祈禱を結ぶのであります。此の句はキリストが御弟子に教へ

給ふた時には無かつたが、第一世紀の終り頃ダビデの言に基き主の禱に附加したものであります。聖徒の信仰が段々進歩するに隨ひ、益々此の簡短なる主の禱の意味を深く味ひ、之を愛する樣に成ります。古來幾千萬の人々が之より甚大の慰藉を得たのであります。求道者をして此の七ッの短い祈禱の中に含まれて居る意味を一ッづゝ自己と他人とに當てはめて考へさせ、又は毎日此の七ッの中の一に就き熟慮して後、祈ることを勉めさせるも、良き考案であると思ひます。

聖洗式

起原

初めて教會に來る人が此の式を以て宣教師の傳へたる英米の習慣であらうとか、或は日本に於てキリスト教會へ加入する者の便利の爲め特に設けられた式であらうと誤解するを防ぐ爲め、聖洗式の起原に特別に注意すること肝要であります。

凡そ何事を究むるにも其の起原に溯つて調べねばなりませぬ、聖洗の如きも極初代に於ける洗禮より研究すべきであります。即ち洗禮は古よりの習慣であるか、又は近代に生じたものか、東洋のものか、西洋のものか、地方的であるか、世界的であるか、又誰の命に依つて之を施すに至つたか等に就き、初めに説明するのは至當の事と思ひます。

さて聖洗式は其の起原を馬太傳二十八章十八—二十の聖言に發し

たものであります故に、此等の節を繰返し熟讀し、其の前後の文を合せて左に研究しませう

(一) 年代。此の御言は今より殆ど一千九百年の昔、キリストが十字架の上に死にて甦り、御昇天なさる前に發し給ひました(此時代の日本歴史を對照する事も興味あるべし)。

(二) 場所。亞細亞の西端なるユダヤと云ふ一小國の北部、ガリラヤと云ふ地方の一の小高き山上に於てゝあります。此の國は其の面積に於て日本全土の四分の一位のものなれども、世界に於て最も著しき宗教上の歴史を有し、又最も宗教的精神に富める人民の住める國でありました。其の名稱はユダヤとも又カナン、イスラエル、パレスタインとも稱へられます。

哥前十五〇六

(三) 集まりし人々。確かなる事はキリストの十一人の御弟子ベテロ、ヨハネ等(十二弟子の一人なるイスカリヲテのユダは此の時既に御弟子の數に洩れて悲慘の死を遂げました)多分其は五百以上の人々の集まつて居る時でした。

彼得前三二〇
馬可十六二〇
希伯來七二〇
馬可十五十六
希伯來二十一〇
約六十〇十

(四) 大なる御遺命。主は『この故に汝等行きて萬國の民にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよ』との御命令を遺し給ひました(十八節との連絡をつけよ)。主は御昇天に際し、先づ天に於て御自分の有し給ふ王者の權に就き、又昇天後も常に御弟子等と偕に在ましたまふ事、常に働き給ふ事、常に救ひ給ふ事等に就き敎へ給ふた後に、此の大なる命令を御與へになりました。是は萬の國民、全人類に關する事で主は實に萬民の爲めに死の苦みを味ひ給ふた故、人は皆殘らず之を知るべき筈であります。此の慈愛の御告、平和の御告を普く世界中に知らせ度いとの聖旨を以て、當時の御弟子は元より凡てのキリスト信徒に對して使者となつて此の限りなき喜びの音を傳へる樣御遺命なされたのであります。

約翰十三〇十三

思を沈め心靜かに考へ見るならば、此の『萬國の民を弟子とせよ』との聖言は誠に〳〵深き御慈愛、寛き聖旨ではありませんか。今より一千九百年の昔御弟子と共に小丘の上に立ち給ふた主イエスの御胸中には、東は亞細亞、西南アフリカ西北ヨーロッパと四海を通じて千萬の民の悉く御側に集めらるゝの日を豫想し給ひ、如何に其の實現の時を待ち望み給ふたでありませう。『弟子とせよ』と仰せられたのは云ふまでもなく主御自身の弟子にとの御意であつて、殆ど千九百年後の今日もなほ幾百幾千年の未來に於ても、凡ての信者はペテロ、ヨハネ、其の他の聖徒等の弟子ではなく直接主イエス・キリストと關係を有し、主によりて父なる神、及び聖靈と親しき關係を保つ事が出來るのであります。主キリストは教會の首で、又各個人の救主であれば、主によりて各自救の喜びと其のもろ〳〵の祝福に與かる事を得、又主の體なる教會内にありて互に兄弟たることを得るのであります。此の大なる救

加拉太三〇二七、二八、

に預かりて主の御弟子の數に入り、凡ての恩惠と種々の特權を己がものとする事の出來る徴、は即ち聖洗式であります。今述べた如く此の洗禮は主御自身の明白なる御命令であつて、キリスト自ら之を建てられ、直接キリストより手渡されたものである事を思へば、その如何ばかり神聖であるかゞ分りませう。

聖洗式に於て最も肝要の言は『父と子と聖靈の名によりて我なんぢに洗禮を施す』と云ふ文字であつて、此の父、子、聖靈の三位の御名によりて新に御弟子となつた者は、聖なる三位一體の神と深遠なる靈の一致が出來、同時に他の信者方と同心となり合一となる事が出來るのであります。

聖奠（サクラメント）

（公會問答の説明參照）

民數記廿一、九〇八
列王下五、十四、九〇
約翰六、七
申命記三、十九、四〇
馬可十三、十一、十〇
使徒六、六、八、九、十七、〇〇〇、三十、三

神は昔し恩惠を人に授くる爲め、神の御惠の保證或は雛形として、度度外部の徴證を用ひ給ひました。第一肉體にかゝる惠の徴として、銅の蛇は之を仰ぎ見し者に救生の方法となり。ヨルダンの濁流はナーマンの癩病の潔められし方法となり。シロアムの水と一塊の土は瞽者の目の啓かるゝ方法となりました。此の外部の徴は第二に靈魂に惠と祝福とを附與せらるゝしるしに用ひられて居ります（例へば按手式の如き）。

聖奠は半ば外部に關し、半ば内部に關するのは（1）私共人間は肉體あるを以て半ば外界に屬し、靈魂あるを以て半ば靈界に屬する故で、又（2）大抵の場合に何事も外部の肉體を通じて靈魂に到達せらるゝ故であります（例へば視感、聽感、觸感等）。

洗禮の水の記事對照

聖奠の外部の徴證。之はキリスト御自身によりて建て定められたるものなれば、私共は自由に之を變更し或は廢止する事は出來ません（一例若し約翰九章に錄された瞽が主の御命令に從つてシロアムの池に行つて洗はなかつたならば癒さるゝ事はなかつたでありませう）。

以賽亞五十七、〇十五、詩百七〇九

聖奠の内部の恩惠。外の徴證と内の恩寵との聯絡に就ては私共の考へ及ぶ處でありません。之は秘れたる奥儀にして聖靈の御働きに由るのであります。然し私共が神の恩惠に浴し度いと思ふならば、必ずなくてならぬ事は、公會問答にある如く悔改と信仰とであります。謙遜にして神の惠をしたふ碎けたる心は、豐かなる御祝福を神より頂きます。

聖洗式の一の大切なる意味は、我らが主イエスの十字架の死と葬と昇天とに親しき關係を結んで、唯だに昔の歴史上の事實として見聞き

加拉太二、十二
五〇六以下
〇〇十四
廿四二所
哥羅三
〇五、六
一四三

馬可五〇
廿四—三
十四

するばかりでなく、自己の心中に之を實驗するのであります。右の事柄に就ては、羅馬書六章等に記されてあります。キリストは吾等の罪を負ひ、死にて葬られ給ひ、また新しく美はしき御身體をもて甦り給ふて永遠の御榮光の内に昇天し給ひました如く、私共も聖奠の御働きと主の贖罪の功とによりて罪とのきづなを斷ち切り、舊き罪の性質はキリストと共に死にて葬られ、靈魂は天來の新しき生命と自由と歡喜とに滿されて生きかへり、天に屬するものとなつて全く新生涯を送るのであります。聖洗の時に深き水の中に全くつかつて再び上ります事は此の美はしき例をなは〳〵明白に説明いたします。例ひ少しばかりの水を用ひて聖洗を施されても其の意味に於て少しも變りません。

私共の内に自慢、冷淡、頑固や其の他の妨碍があつてはなりません。昔キリストに押あひ從つた群集の中で聖衣の裾に捫つて主の聖力に癒された者は、信仰を以て御恵みを求めつゝあつた唯一人の婦人のみであります。

救を得るに必要なる聖奠

洗禮は神の家族なる教會に入る爲めの門戸で、聖餐は神の恩恵と聖なる交を繼續する爲めに神の定め給ふた方法であります。神は聖旨により此の二ッの聖奠によらず他の方法を以て信者に恩恵を施し給ふは容易なる事でありませう。なれども主は深き御思召を以て此の特別なる方法を選み給ふたのであります。故にこの聖奠によらざれば救はれないと私共は斷言致しません、然し救を得たいと望むならば主キリストの御定めになつた方法に從ふと云ふ事は理の當然であります。主の定め給ふた方法こそ最も聖なる最も安全にして確實な方法であります。

基督の定め給ふた聖奠は信者が其の教へに服從する事を見はす記號である許でなく、神の恩惠と愛との確實なる證憑効力ある記號であ

ります。即ち神は之を以て幽妙に吾等の中心に感化を與へ給ふて靈性の生命を附與し又其を養ひ給ふのであります。

聖洗式は唯に敎に遵奉する記號、信者と未信者との區別である許りでなく、私共の新に生るゝ記號である故、正しく洗禮を受る者は木の枝の如く之に由りて母木の敎會に接がれ、其の罪赦されて神の子とせらるゝことの二つの約束が明に印證せられます。隨て信仰は強められ且つ祈禱の効によりて神の恩惠も愈々加はるのであります。「聖奠」の語は何でも聖なる事物の意味で、こは最も古き拉丁語にて、兵卒の入隊の際上長官に對して最も忠勤を盡すべき旨嚴肅に約束する誓を指したのであります。尙此の語は希臘語の「ムステリオン奥義」の飜譯語に用られたので、是は見えざる者を指した見ゆる標式であります、此の語は昔は聖なる事物の儀式又外部の記號に廣く用ひられましたが私共は今は公會問答に說明されて居る特別の意味に用ふるのであります。

聖洗の契約

創世記一九七　創世記十五　創世記十八　出埃及記十二　希伯來七十二　

神は昔時諸々の外部の記號を用ひて人と契約を結び給ひました。二三の例を擧ぐれば

（一）ノアとの御契約。虹の徵。（二）アブラハムとの御契約。第一星。第二烟と火焰。第三割禮式（但し之は人が神に對して忠勤を盡す記號に建てらる）。（三）神がイスラエル國民をエジプトより救ひ出し給ひし後、建て給ふた契約にて、民が神の律法に服從すると云ふ條件のもとに約し給ふたもの、灌がれた血の徵。之は典例の契約又は舊約とも稱へらる。聖洗は新約の記號にしてキリスト・イエスに由りて私共に給ふた恩惠の契約であります。この新しき契約は人間の罪深き事、及び弱き事を承認し、價なくして賜はる罪の赦しと愛を以て神に事へる力を附與せらるゝのであります。往古に神の約束し給ふた舊約はキリストの受肉降誕及び死によりて成就せられ、主は即ち御自分の血

を以て此の契約を印し之が中保となり給ひました。然れば人の方面よりの契約はと云へば是れ即ち聖洗であつて、此の聖奠は神と各個人との間の契約の印證であります。

何故聖洗は唯だ一度受けるのみであるか。

聖洗は神と私共との大なる契約の徵また印證であります、然れば受洗者の方面の約束の履行が如何に不完全であるにせよ。信徒は既に一旦公然と神の印を押されたるもので神の方面の御約束は依然として變らず存在して居るのであるから、如何なる事ありても二度と神に御約束の御履行を求むる必要がありません。私共は既に〳〵其の尊い證券を得たる者なれば其の特權をおぼえて益々神の御恩惠の富を我がものとし、喜び感謝して用ひるが我らの取るべき道で、私共の信仰の希望は感情や理論によらず唯聖洗と聖餐との聖なる印證によつて、確認された御約束の上に立つて居るのであります。私共は謙遜のうちにも大膽なる信仰を以て之を利用するのであります。

洗禮の名

洗禮を授けらるゝ時に新しき名をつけて頂く人も有り、又は舊き名を聖めて用ふる人もあります。名と云ふものは實に大切なるものにして、苗字は己がぞくせる家系等を示します。昔時士族の家に生れし男子は最初幼き時の名を附せられ、成人の後更に命名式を行ひ名親より新たなる名をつけられます。詩人、畫家等はよく雅號を用ひますが之は度々己が敎師の號の一字をゆづられて似た號をつけます。佛敎にては僧侶になる時に變名いたします。又佛敎信徒は死後「改名」「謚名」と云ふものがあります。また「有名」「名高」等云ふ言は共に名の深き意味を示します。斯る凡ての事は洗禮の新しき名につき面白き敎訓を與へるものであります。斯く名前は誰の子供たるか、誰にぞくする者なるか、何れの敎師に學びしかを現す如く、洗禮の名は自分の神の子供と

なり主イエスに屬する者であり聖靈の數を受け居る事を示します。

先祖より代々傳はりし家名を汚す事は祖先の名を汚す事として此上もなき恥辱なりと昔より云ひ傳へられて居りますが、新しき名を付けられし信者の生涯の惡しき時は、貴き神の聖き御名に恥をかける事となります。さらば洗禮の際に與へらるゝ新しき名は未だ罪によつて汚されし事なきものなれば、永久に生命の書に記さるゝ樣天つ御國に至るまで主の血によつて潔く保ち度いものであります。

受洗者の三大特權

聖洗に於て神も人も共に三つの約束を致すのであります。神の方面の三つの約束により受洗者は聖洗によりて神に對して新しき地位に立ち新しき關係を有する者となります即ち

（一）キリストの肢とせられます。

葡萄樹の譬にある如く、キリストに常に連なつて居る事は喜んで力強く活々する唯一つの秘訣であります。哥林多前十二章十二—廿七、以弗所四章等を見れば首なるキリストと信者との關係を一つの體と四肢とになぞらへてあります。パウロはキリストにありて生る生涯の歡喜と幸福に對する己が實驗を加拉太二〇二十四節に美しく云ひ顯はしました。

（二）神の子とせられます。（前篇父なる神の說明參照）

約輪十五一八
以弗所一、二
二三
同四、五
十一
哥羅西十一
十八
加拉太二十七
約輪一〇十二

加拉太三〇廿六

受洗の後には再び罪を犯し、父なる神に向つて放蕩息子とならないにも限らざれど、若し眞に悔改めますれば、神は再び汝を與へ聖前に引歸し給ひます。然し斯る經驗なくして忠實なる神の子たるに適はしき愛の生涯を送る樣、常に神に祈らねばなりませぬ。

ロマ八〇十七　加拉太三〇廿九、四〇七

(三) 天國の嗣とせられます。

哥前二〇九　以弗三〇八　彼前一〇四　路加十二〇廿二

此處で嗣とは(1)現在に於て凡て何かを領して居る者又(2)未來に於ても何かの嗣となる人の事を意味します。換言すれば(1)地上に於ける敎會の祝福と特權との嗣(2)天に於ける敎會の祝福と特權との嗣と云ふ事であります。天國即ち神の王國は天より地上に來る現在又永遠の王國であります(主禱文の「御國を來らせ給へ」の說明を參照)。

神の私共の爲め備へ給ふ實は想像の及ばざる程のものであります。

三つの約束

馬太十三〇二五　彼得前五〇八

神との契約に於て私共人間の爲すべき約束も三つありまして、最も嚴かなる誓であります。(聖洗式中の受洗者への勸言を參照し公會問答を聖洗式と對照せよ)其の第一の約束は左の三つを捨つる事であります。

(一) 惡魔の所爲をすつる事。之れは神の恩惠と祝福を受る爲には最も必要なる事にて、バプテスマのヨハネは來らんとする救主の爲め最も大切なる心の準備は罪を悔いて之を全く放棄する事であると敎へました。古き罪惡は習慣であれ、動機であれ、慾望であれ、皆之を放棄して仕舞はねばなりません。聖なる神と罪惡とは絕體に合はないものであります。私共のすつべきものゝ第一は惡魔と其の凡ての所爲。即ち外部より來る誘惑であります、惡魔は神と人との敵なれば「サタン」

提摩太前三〇六　哥林多後一一八〇三　約翰四四各四〇　雅得前五七　彼得前八九　以弗所八〇十一十六　加拉太六一二　約翰壹四五一二　加拉太六十一　馬可二十三　馬可二十四　提摩太後一一　十六十七　十一十九　希伯來十二　路加二五〇　馬太二八一十四　馬太六〇　馬太五〇　二七　二八　加拉太五　六十　廿四

(敵)とも言はれて居ります。萬ての罪は惡魔の働きなれども其の特別なるものを擧ぐれば(1)高慢(惡魔自らの陷たる最大原因)(2)人を惡に誘惑する事。(3)欺瞞、狡猾、詐僞、(4)怨恨、憎惡等であります。私共は唯神の大なる御力によつて惡魔と其の所爲を拒ぎ得るのであります、(主禱文中の「試に遇はせず」の説明を見よ)。

(二) 此の惡しき世の榮耀榮華をすつる事。之は即ち四圍の境遇より來たる誘惑であります。此處にある世とは「自然」とか「人類」とかを意味するのでなく、神より離れ神の聖旨に服從しない、むしろ神に反する社交的生涯を言ふのであります、虛榮、見えを張る等は非常なる危險であります。傳道の書を見れば神に事ふる事なく神の祝福なき此の世とその樂しみや榮耀、榮華などの空にして失望に充てる事を説いてあります。神なき人は早晩之を實驗するのであります。此の世の社交必ずしも惡でありません、又商買をいとなみ、金を儲け財産家となり、或は名聲を博するも良き事であります。然し是等を第一位に置き、之を人生の目的として是等の爲めに心を奪はれ神を忘るゝは大なる罪であります(此世の誘惑に打勝ち位置や此世の富等を捨てゝ神に服從したモーセ、マタイ及び主イエス・キリストの實例を擧げて話すべし)。

(三) 肉の惡慾をすつる事。之は即ち內部の誘惑であります。「肉」と云ふ言は聖書に於て時々「肉體」又は「人性」の意味に用ひあれど、又しばしば墮落紊亂した惡しき人性を意味するのであります。肉の行に就いては加拉太五〇十九—二十一に明白に錄してあります。人の當然有すべき慾も、度を過し或は亂用すれば罪となります(例へば飢渴は貪食酩酊となり、睡眠は懶惰となる)。私共は外部の行爲と共に內部の惡き思想、慾望を放棄せねばなりません。之は只だ聖靈の御働と主イエスの十字架とを信ずるによりて出來得る事であります。此の爲めに大齋第一主日特禱及三位一體後第十八主日特禱は良き祈禱であります。

羅馬三〇二二、二七
五—二七提摩太後三〇一五以弗所二〇八猶太三
提摩太後四〇七比一詳立二七〇
默示錄三〇一
約壹五〇四、五
詩四八〇十四
馬太十〇二二、二四〇十三默示錄二〇十

第二の約束はキリスト教の信仰個條を信ずる事(使徒信經に關する教への處參照)であります。

信仰によりて私共は救はれるのであります。神の子として新生命に入る時に私共は眞の信仰を堅く守り之を維持すると云ふ大責任を負せられた者であります。キリストの愛にはげまされて此美はしき信仰を守る事は、忠義をつくす喜ばしき務と思ひて自ら進んでいたします。一度愛による生ける信仰の欲が消ゆるならば、其の信者はサルデスの教會の如く「活ける名ありて實は死ねる」者であります。私共はキリスト教の信仰個條の一、二を信ずるのでなく、凡てを信ずる處の活ける完全なる信仰を有ち度いものであります。

第三の約束は生涯神の御心に從ひ其の誡命を守る事。

「生涯」即ち一生の間忠實に事ふる事であります(公會問答の神に對する務參照)「神の聖旨に從ひ其の誡命を守る事(主祈の「御心を地にも行はせ給へ」の處、及び信仰の結果としての服從と實行の價値に就て錄しある使徒信經と十誡との說明參照)神の御旨は即ち神の私共に望み給ふ處で聖パウロの改心の當時神の御旨を尋ねた通り、私共も神の御旨に從ひ其の誡命を守る爲めに、常に主の御心を考へ子供の樣な柔順な心を以て其御導きを待ち望み、夫に從ふ事を熱心に勉むる事を約束いたします。(我意を恣にした者の例證はアダム、エバ、カイン、バラム等)良心の責なき樣に勉め又自ら躓かざる樣に勉むる生涯ほど幸福なものはありません。

馬太七〇二十一、
使徒九〇六
羅馬十二〇十一
使徒二十三〇一、二四〇十六猶太二四

聖洗の水(約翰三〇三、五。徒二〇三七—三九。二二〇十六。多三〇五。詩五十一〇)

志願者若し未だ洗禮式を見し事なければ一應其式を說明する事必要なり、

洗禮式に於て最も大切な部分は受洗者に水を灌ぎ或は水中に入らせる事であります。故に此の式を洗禮又は洗の禮と云ふのであります

す。

（一）水。此の式に水を用ふる理由は、これ全く主の御旨より出たる御命令であるからでありますが私共も其の理を悟るに難く無いのであります。即ち水は世界中最も必要なる『潔』と『生命』との二つを顯はすものであります。水は私共の生活に寸時も缺く可らざるもので（食物を調へ、飲料に供し、洗濯に用ふる等）主は特に此の何處にても容易に得らるゝ美しき水を徴として何人にも能く洗禮の意義を理解せしめ給ふのであります。

（二）水を『潔』の休徴に用ふる事は稍之に類似した思想が大抵の宗教にあります（志願者は神道や佛教に之に類似せる事のあるを知つて居りませう）。印度に於ては罪を洗ひ去る爲め幾萬の人がガンゼス川に行つて身を洗ひます。昔キリスト御降世以前には、ユダヤにても屍に觸るゝ等の汚穢を去る爲に水にて潔める式がありました。又舊

出埃及記四十〇卅一卅二

約書に依ると幕屋に於て祭司の用に供へる爲め外庭に大きな黃銅の海（洗盤）がありました。後エルサレムの殿に於ても大きな水桶と十の洗盤が供へてありました（日本の社殿の前にある手洗鉢も亦同じ思想より出でたるならん）。キリスト御在世の時に異邦人がユダヤ教に入るには洗禮式に似た事を行つたでありませうが、ユダヤ人の爲の洗禮式はヨハネの時までありませんでした。バプテスマのヨハネが起つて悔改を說教し、罪を捨てゝ神の僕として身を捧げしめる徵に初めてヨルダン川にて洗禮を執行しました。各種の潔め式なるものは（バプテスマのヨハネの施したものすら、今日の洗禮の準備に過ぎない）キリスト教の洗禮とは餘程異つて居りますが、然し各宗教に共通の一大思想が含まれてあります。即ち之に依つて世界中の何人も罪惡や、汚穢や恥辱を潔め去られん事を深く慕ひ求むる念を有つ事が知れます。特に禮拜に關して考ふるに、此潔めは最も肝要な事であります。私共

詩六六〇十八

は潔められざる心をもて神に近づく事は決して出來ないのであります(神道の說を參考せよ、たゞし神道のは單に儀式に止れどもキリスト敎のは心を主とす)。志願者をして受洗に先だち神の聖前に極靜かに眞面目に自省せしめるは甚だ必要であります。世俗の毀譽や善惡の標準等は少しも心に掛ける事は要りません。唯だ神の標準を目的とする事を務め、主イエスが地上に在した時に天の高く潔き御生涯をなさつた如く、神に屬する者も主に倣はねばなりませぬ。主を深く知れば知るほど、自分の心が潔に進み、性格や理想が高くなればなるほど己が諸々の咎と缺點を悟り、之を耻ぢ憂ふる謙遜な心が起ります。罪の力は驚くばかりに强く何人も之に打勝ち之より逃れることは不可能であります。唯主の血しほの功績のみが世人を凡ての罪より救ひ、其の心を潔くする事が出來るのであります。聖書を開いて見ると一國の王、しかも主イエスの御先祖に當る名高いダビデ王の心の叫や、大預

詩五十一〇以賽亞六〇五

言者イザヤの心の底より出でたる叫が記してあります。斯く尊き王でも預言者でも人間は皆心中の苦難に耐へかねて叫ぶのであります。或る人が『嗚呼、聖なる神に由て支配されて居る此の宇宙間に罪の重荷に苦んで居る我が心の淋しさよ』と言ひましたが此感想は恐らく何人も多少經驗のある事であらうと思ひます。故に昔より聖書の中に左の如き祈禱があります、『我が不義を悉く洗ひ去り、我を我が罪より潔め給へ。汝ヒソプを以て我を潔め給へ、然らば我淨まらん我を洗ひ給へ然らば我雪よりも白からん』云々(是等は成るべく暗誦して度度用ひる樣勸める事はよい事であります。ヒソプの如き解しがたきものは省略し、或は往古、潔め式に血を用ひる際に其草を使用せし事を說明すべし)昔しイスラエル人は罪を潔めらるゝ徵證に犧牲を捧げましたが、其は皆後にキリストが人類の罪を贖ふ爲め自ら神の前に犧牲となり給ふ表式に過ぎないのでありました。

詩五十一十二、七、

約翰壹一〇七　彼得前二〇二四　哥羅西一十三、十四　馬太二六二八　羅馬六〇二十三

また水は生命を意味するのであります。私共に取つて必要な事は唯罪の赦しばかりでなく、同時に新生命が必要であります。受洗者は罪について死に、義について新に生るゝのであります(公會問答參照)。罪の爲に靈の生命が衰へ、惡しき行爲の外は何の活動も出來ない私共の心は、罪を赦されても新生命を受けなければ寢る人に異ならないのであります。神の他に罪人を救ひであります。是非此の賜が必要であります。神の他に罪人を救ひ得るものは無い、故に人間の救主は是非神でなければならぬ。又人間が罪を犯したから其の責任を負ひ死の刑を取るものは人で無ければなりませんでした。されば神にして人なるイエス・キリストの外に私共の爲め贖罪の大任に當る事出來る者は天下に一人も無いのであります。而して贖罪の方法は唯十字架の道一つであります。イエス、キリスト十字架上の死は私共信ずる者に『罪の救』と『生命』との二つの賜を與へるのであります。罪が人の魂を亡ぼすに反し神の賜は生命であり、價なくして得らるゝ自由なる惠の賜であります。

約翰三〇五、十六

さて洗禮は此等の大切な深奥な神の眞理を顯はすものであります。から、志願者は受洗前に凡て從來の惡しき事を全く悔い改め、神と己の間を隔つ離となつて居るものは如何なる僅少の事にても之を悔改め、不信仰、高慢、無慈悲等の如きは云ふに及ばず、惡い習慣、卑猥な思考や、言行や、自ら打勝ち難きか又は陷り易き過失を悉く神の御前に改悛し曾に現在の不善のみでなく過去に犯した罪の未だ悔改めざるもの或は告白せざりしものあらば、それ〴〵神の御導と御赦を受けねばなりません。又志願者は罪の赦しを祈り求むるばかりでなく新なる心新なる生涯をも祈り求めねばなりません。右の順序を踏みたる後、前に述べた種々の恩惠を受くる證なる聖洗式に與かる自覺と歡喜とを得る事が出來るのであります。此等の事を深く考ふれば罪人なる私共に顯はし給ふ神の御慈愛を永久に感謝し讃美せねばならぬ事を認む

詩百十六〇七、八　羅八馬五〇　約翰十三十五　彼得前二　〇二四　以弗所二　〇十六　哥羅西一　〇十四　加拉太六　哥林多前三　二四　雅歌二　一〇二三　哥林多前一　六〇十九　哥林多前二　二十　加拉太六　〇十四一六　太二四

るのであります。故に此の心得を以て充分志願者を教養せねばなりません。

聖洗に於ける十字架の記號の意義

キリスト信者がキリストに屬する者として種々の記號があります が、世界中に於て最も多く用ひられ最も尊まれて信徒の心に一番深い印證を與ふものは十字架の記號であります。十字架は即ち父なる神の愛の徵。救世主の愛の徵。贖の徵。信徒の誇とする處の徵。

其下にあつて惡魔と戰ふ處の旗號(祈禱書洗禮式參照)であります。此聖洗に於て十字の徵は私共が罪を赦され、主キリストに由りて救はれ。キリストに献ぜられ罪を離れ罪に死ぬる者となり、主に從ふて十字架を負ひ。愛の生涯を送り。兄弟の爲めに自分の生を放つるの準備を爲すの意義に於て受洗者の額に印さるゝのであります。

願ふは此の十字架が凡てのキリスト信徒に取りて、唯外部の徵ばかりでなく深く、心にきざまれ、永遠に存ずる不朽の記號とならん事を。

約翰壹三〇一六

教父母

教父母になる樣にと依賴されて洗禮の時共に立つて證人となる事は誠に喜ばしき事であります。或る人の考では己が責務は最早や之にて終れりと思ひますが、決してそうではありません。(教父母に對する勸め參照)。

一生涯教へ子の信仰の友人として、其の人のため絶えず祈禱をさゝげ、其の信仰を助け、靈的進歩を發達せしむる重大なる義務があります。遠く離れて居ても何時迄も忘れずして熱心に祈る教父母は、測る事の出來ない程大なる助けと奬勵とを與へる事が出來ます。

萬一教へ子が冷淡なる事、墮落する事があつても、氣を落さずして、悔い改めて新しく生まるゝ時まで代禱をさゝげ、力を盡す事は、教父母の愛の義務と特權であります。

教師に對する言

教師は必ず受洗前志願者と共に聖洗式を一度熟讀し、その解しがたき處を説明して聞かさねばなりません。

なほ受洗後も其の受洗者が受けし惠を失はざる樣に、その新しく得た位置に立つて續て惠に惠を加へられ日に增しキリストを知り又聖書を知る智識に向上進歩する樣に引きつゞいて敎導する事を喜ばしき義務とせねばなりません。

受洗者が洗禮を受しによりて我が務終れりと云ふ樣な心を起す事なく、聖洗はキリスト信者の信仰生涯に於ける第一階段に過ぎない事を知り、一意專心主の道に從ふやうに注意するは肝要なる事であります。其と共に又受洗者が信仰生涯の最初よりキリストの御慈愛にはげまされてその時間なり金なり力なりを喜んで神に捧げ神の爲め敎會の爲め僅かなりとも必ず盡すと云ふ精神を養ふ樣に勸める事は受洗者の大なる助けとなるのであります。斯の如くにして更に歩を進めて接手を受け聖靈の賜を受け、進んで最も嚴かなる聖餐の大奠に與り、愈々キリストの高德に傚ひ、キリスト信徒の一人として主の聖名を恥かしめざる靈の生涯を送る事が出來る樣に望み又祈るのであります。

願はくば我儕の中に行ふ能力に循ひて我儕の求むる處思ふ所よりも甚く過れる事を行得る者にキリスト・イエスにより敎會の中にて世々窮なく榮た歸せんことを。アヤメン

（以弗書三章二十、二十一節）

洗禮のしたく 終

PREPARATION FOR BAPTISM

BY

MISS A. C. BOSANQUET

TRANSLATED

BY

MRS. F. KOIZUMI.

Published under the Auspices of the Society for Promoting Christian Knowledge.

THE
CHURCH PUBLISHING SOCIETY
(Nippon Sei Kokwai Shuppansha.)
KOBE

1917

This little book will, I trust, supply a long-felt need. The author has had long and varied experience in a large town, and has had to prepare very many women for Baptism; she has also had many intimate conversations with learned and unlearned, young and old, and has been enabled thus to find out the difficulties felt in many classes, and also, to a large extent, the way to explain them. It will be found that the greater portion of this book is concerned with the full explanation of the Creed. It is of the utmost importance that those who are admitted into the Church by Baptism should "know Whom they have believed," and time is well spent in bringing Catechumens to a true knowledge of the Majesty and Greatness of the One True GOD, and of the glorious Mystery that He has sent His Only SON to be the Saviour of the world, and of the infinite Blessing enshrined in the wondrous fact that to those children who acknowledge Him as their Father He gives the Spirit of his Only-begotten Incarnate Son. Teachers must never forget that the very words in common use among Christians are often quite unintelligible to those not accustomed to them, or rather that they may bring entirely different ideas to their mind. To a polytheist the term "God" has to be carefully explained and his misconceptions removed, before he thinks of the One Supreme Ruler of the Universe: to many also "sin" means rather open transgression of the country's laws than the defilement of flesh and spirit whether by outward act or inward thought, and so on: so that the utmost pains are

needed in leading on patiently and intelligently and sympathetically the enquirer after GOD. To those who desire so to work this Book will, I trust, prove of the highest value. Like all other books intended for the guidance of workers, it must be used with intelligence; in some cases certain parts may be passed over quickly, while greater stress must be laid on others; but all is written with the intention of bringing out the importance of the careful preparation of all those who are to be admitted into the Household of GOD, who will thus become responsible for the privileges of being made children of GOD, members of Christ, and heirs of the Kingdom of Heaven.

I would say in conclusion that it is in answer to many urgent representations that the author has undertaken this responsible task, in which she has had the assistance and advice of several experienced Japanese fellow-workers: and I earnestly hope that this Manual may be found a real help to many faithful workers and others, and also be of great use in other ways beyond the immediate intention of the writer.

Kobe, July 2, 1917.

HUGH JAMES FOSS,
Bishop.

大正六年八月十五日印刷
大正六年八月二十五日發行

（定價金六拾錢）

著者　エ、シ、ボサンケット

發行者　神戸市下山手通五丁目外十五番
ヒ　ユ、ゼ、フ、ヲス

發行所　神戸市中山手通三丁目外五番
日本聖公會出版社

印刷者　神戸市吾妻通三丁目十七番屋敷
菅　間　德　次　郎

印刷所　神戸市吾妻通三丁目十七番屋敷
福音印刷合資會社神戸支店

不許複製

▲本書讀者の參考とせらるべき好著▼

未信者に與ふる書

元田博士著

定價十錢　郵稅二錢

吾人が持てる信仰の如何なるものなるやを未だ此の道に入らざる人に語りて、俱に福音の道に歩ましめんことは吾人の熱望する所なり、此の目的を達せんには本書は實に隨一の要具と云ふべし。

福音入門

ミセス、ピカステス著

第三版

定價八錢　郵稅二錢

本書は著者が某婦人教役者の求めによりて、洗禮志願者に福音史の要領を會得せしめんため主の御生涯を美はしき筆にて書かれたるものにして洗禮準備をなすには必需の要書なり。傳道用書として倍舊御購求あらんことを冀ふ。

基督者の信條

監督ゴア原著　藤松榊譯

四六版　定價四十錢　郵稅四錢

ライトペーパー

本書は有名なる牛津の監督ゴア博士が浩翰なる神學書を讀み得ざる人々のために基督教信條の何たるかを平易に說かれたる講演なり。原書は英語を語る國に於て頗る好評を博したるものなれば本譯書も我國讀者を裨益すること多大なるべきを信ず。信徒の教養に本書を用ゐられんことを望む。

公會入門

山縣雄杜三譯

三版

定價十二錢　郵稅二錢

更に進みたる人が衷心神に事へんとして先づ手に取るべきは此の書なり。內容は、信經、主禱文、十誡、教會に關する訓誡、信徒按手式、聖餐、生涯訓、祈禱、其折々の小祈禱、祈禱に關する簡易の規則及主禱用法等なり。

基督信徒の修養

長老前川眞二郎著

（新刊）

定價廿五錢　郵稅四錢

內容は、懺悔と信仰、祈禱と斷食、聖書と默想、禮拜と聖奠、特權と責任の五章に分ち各章を多くの項に分ちて辨證的に說かれたれば啻に信徒の讀物たるのみならず未信者求道者にも其疑惑を解くに裨益ある良書たるを信ず。

キリストの奇蹟の特質

長老シ、フヲックスレ原著　吉田菊治郎譯

菊版半截　定價六錢　郵稅五部迄二錢

本書は福音書中にあるキリストの奇蹟の動機、目的及其機會と結果等に關し其の特質を簡短明瞭に說明し從來世に流布せる神話的傳說と類を異にせる點を示せり基督の御生涯に對する未信者、求道者の疑惑を解くに最適當肝要なる小冊子なり。

監督ウイリアムス著

主禱、十誡
使徒信經 **問答書** 各別冊　各別冊金五錢　郵税金二錢

洗禮、按手
聖餐 **問答書** 各別冊　各別冊金六錢　郵税金二錢

監督ヒユ、ゼ、フヲス著
洗禮志願者の祈　一枚二錢百枚一圓八十錢　郵税三十枚迄二錢

長老貫民之介著
再版 **基督教入門**　定價十錢　郵税二錢

發賣元　**日本聖公會出版社**
神戸市中山手通三丁目外五番
振替口座穴阪九一〇九

本社出版物は本社若くは左の販賣店にて便宜購求せられんことを希ふ

販賣店　東京 教文館　大阪 福音社　京都 同信房　神戸 福音舍

325
327

終